
路地裏のクマ

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

路地裏のクマ

【Nコード】

N1414T

【作者名】

きみよし藪太

【あらすじ】

車に轢かれても大丈夫な不死身のタカちゃん。

路地裏のアパートに住んでいる、クマみたいな男の人。

そんなの、惚れちゃわない方がおかしいでしょう、恋に落ちないはずがないでしょう、女子高生だからってバカにしないでもっとあたしを見てくれればいいのに。

路地裏のクマ・1 (前書き)

ちょっと長いですけどお付き合いいただけると嬉しいです。

すごい音がして目の前で自転車がぐしゃりと潰されて、脇のスーパーからもたくさん人が出てきて騒ぎ出して、向かいの本屋も通りに面した壁がガラス張りになっていてそこから店内の人が駆け寄ってきて、ざわざわつと人の声が混じり合っつてすごいことになっていたのに、タカちゃんはひょっこりと起き上がると、あーあ、とだけ言った。

あーあ自転車おじやんだな、と、多分続けたかったんだと思う、もちろんあたしはその時タカちゃんの名前なんて知らなくて、ただやたらと大きくて　それは縦も横も　紺色のダサっぽいジャージを着ているけれどそんなに悪い感じじゃなくて、短い黒髪は触ったら刺さりそうなほど硬そうな男の人だ、という、外見のことしか分かっていなかった。大きなオフロード車というのか、ごつい車から若いお兄ちゃんがふたり降りてきて、真っ青を通り越して真っ白もいところな顔をしてタカちゃんに声をかけてたけど、彼は大丈夫のジエスチャーとしてらしく手をひらひらと振って、腹筋を使っほいっつと立ち上がると、自転車だけ弁償してくれ、とか言ったらしかった。

あたしはその時学校をサボって帰る途中で、とろとろつと自転車に乗っていたらいきなり目の前で事故が起きちゃって、もしかしてあたしが学校サボったせいなんじゃ、なんて訳の分かんないことを考えちゃって、ごめんなさいごめんなさいってずっと口に出して言っただけど、ちっちゃい声だったからきつと近くにいた人は念仏でも唱えてるんじゃないかと思っただんじやないかな。ドカン、とぶっかって、でもタカちゃんはむっくりと起き上がって。観客　言い方は間違ってるのかもしれない　はもつとどよよつとして、あ

たしには彼が不死身で無敵のすごい人に見えた。要するに、恋に落ちちゃったってこと。

だって格好いいじゃない、車に轢かれて平気な男なんて、後で聞いたら自転車が高の下に滑り込んで、それを噛んで車が停まっただけなんだってタカちゃんは言っただけ、でもそれだって運が強いってことだし、それはそれですごいことだと思う。

タカちゃん。あたしと干支が同じで、でも年が違うの、肉体労働をしている人だからなのか、日に焼けている肌が粗くって、実年齢よりちょっと老けて見える。でも大人に見えることはいいことだ、時々小学生に間違われてものすごく哀しい思いをするあたしから見れば、老けて見られるのなんて羨ましいくらいだ。

「おおい、もう帰れ」

今時セーラー服ってなんだろう、うちの学校は趣味が悪い。制服が高く売れたのなんて昔の話で、今は大型安売り店なんかに行くとおかまサイズでもいろんな色の制服なんか結構安く手に入る。インターネットもあるし。ネットオークションとか。

タカちゃんは紺色プリーツのスカートから白いソックスの脚を投げ出しているあたしを見ても、なんとも思わないらしい。欲情、してくれない。ガキなんか趣味じゃねえよ、とひどいことを言う、でもあたしはガキだから生意気そうに笑って、あたしに溺れるのが怖いんでしょう、なんてテレビだかなんだかで聞いたセリフを言うてみる。

「馬鹿言え、帰れ！」

タカちゃんは大人げないので、あたしがそういう口を利くと怒る。彼が轢かれた日、潰れちゃった自転車を歩道にうつちゃって、すてすてと歩き出したその背中をあたしは慌てて追いかけた。欲しいものはすぐに欲しいと言わないと売切れてしまう、言いたいことはその場で言うておかないと相手が次の日には死んじゃってたりする。追いかけて声をかけた、あんなに見物人がいたのに、誰一人としてタカちゃんに声をかけなかったのがあたしには不思議だった。

名前教えてください、だったか、お家に遊びに行ってもいいですか、だったか、最初に何を言ったのかは忘れてしまった。でも順番を忘れただけで、ちゃんと両方口には出して、そんなあたしに驚いたタカちゃんはだけど無視して歩き出しちゃったから、勝手にその後をくつついてった。逆ナン、大失敗だけどストーカー行為は成功？ 相手はあたしに欲情しないけど。

「うそ、ごめんねタカちゃん、うそよ」

でもちよつとくらいあたしにクラつときてもいいじゃん、現役女子高生なのにさ、それともやっぱりもう女子高生って古いのかな、時代は中学生？ 小学生？ だけどタカちゃんはガキなんて嫌いだって言うから、きつと年上が好きなんだね。

「タカちゃん、お腹空いた」

「帰って飯食え」

「いいじゃん、お兄ちゃんの非常食食べちゃおう、食べていい？」

タカちゃんはそう広くもないアパートでお兄ちゃんとふたり暮らしをしている。でもお兄ちゃんは女の所に転がり込んでいるらしいので、今は一人暮らしもほぼ同然で、だからあたしなんかがちよるちよるしても平気なのだという。タカちゃんのお兄ちゃんはケダモノで処女が大好きで残虐で最低らしい、吸血鬼と狼男を足したようなものなのかしら。

「女がカップ麺ばっか食うな」

「なんで、それって男女差別だよ」

「成長期は栄養取らなきゃなんないだろ」

「カップ麺だつてちゃんとカロリーあるもん」

「馬鹿だな、カロリーと栄養は違うだろう」

どこが違うの、と聞いてもタカちゃんは答えなかった。調子に乗ってもう一回同じことを聞いたらすごい目で睨まれた。タカちゃんの目はあたしをぞくぞくさせる、獣みたい。夜中に角を曲がったらそこに居てしまった、猫科の動物みたい。あ、クマの方が似合うかな。

「じゃあご飯食べに連れてって」

「お前何様だよ」

「ファミレスでいいよ」

「やだよ、お前みたいなガキ連れて歩くの」

みつともない、とタカちゃんは言う。でも粘ればタカちゃんは渋々でも相手をしてくれることを、あたしは知っている。出会いのあの日だって、路地裏のアパートの前でさすがに図々しく部屋までは押しかけられなかったあたしがぼけっと突っ立っていたら、一時間くらいして顔を出したタカちゃんがびっくりした顔をして、だけど変な奴だ、と苦笑いみたいなのをして入れてくれた。粘れば勝てる、多分。

「じゃあピザでもいい」

「家帰って飯食え」

「お金出すからさー」

「金の問題じゃないって」

「そうだよ、あたしはタカちゃんにご飯食べたいただけだもん」

「……何の話してんのか分かんなくなるな、お前としゃべっているとピザより寿司食いてえ」

ほら、粘り勝ち。でも今回はタカちゃんがお腹空いてただけみたい。ぐちゃぐちゃに物が突っ込んである本棚から、ピザと寿司とお弁当屋さんの宅配チラシを取り出して、あたしに手渡す。選べってことだな、そして電話して自分で注文しろってことだな。

「タカちゃんどれにするのー？」

「寿司。寿司寿司」

「どのお寿司？」

「お前どうせピザも頼むんだろ、そんなにでかい寿司じゃなくていいぞ」

「助六？」

そんなガキの食い物みたいなの誰が食べるか、マグロとかいくらか入ってるのにしろよ、とタカちゃんが呆れたように言った。

「あたし生魚食べられないよ」

「お前が食えないもんは俺が全部食ってやる」

ああ、タカちゃんは優しい。

どうせピザもお寿司もあたしがお金を出すんだけど、そういうんじゃないくて自分の食べたい物だけを押し付けないところとか、ピザもお寿司も両方取っていいとかいうところが、あたしは優しいと思う。

「女子高生に奢られて、タカちゃんいい身分だよなー」

またジロリと睨まれた。別にそんなにサービスしてくれなくてもいいのに、あたしは彼のきつい目付きが大好きだ。

外では雨が降っている。窓を叩く激しい奴で、家の壁を貼ったり防音材を入れたり、よく知らないけどそういう仕事をしているタカちゃんは晴れていないと仕事が休みになるらしい。女子高生に奢られて仕事は休みでいい身分だよなー、と言ってやれば良かった。

ピザはトリプルスターという四種類のピザが一枚になっている、どこがトリプル？ なやつを選んで、マヨコーンとシーフードと和風チキンアスパラとポテト&炒り卵にしたよ、とわざわざ教えてあげたのに、タカちゃんは鼻で返事をしただけだった。

蓮根のキンピラ、春菊のおひたし、キャベツのお味噌汁に鶏そばろご飯。

あたしの行く私立の女子高はいわゆるお嬢様学校という建前の馬鹿学校で、被服科と普通科とがある。被服科は時々頭が良くて洋服を作る勉強がしたいから入ってくる娘もいるけど、普通科は頭の悪いのばかり。でも馬鹿ばっかつてのは結構楽しい。女ばかりだからいじめもあるけど、そしてあたしもいじめられたことがあるけど、ターゲットなんてごろごろいるもんだからずっといじめられ続けたりはしない、気がする。

馬鹿学校だから、卒業したらお嫁にでも行け、っていうのが教育

方針みたいで、だからあたし達は調理実習とか繕い物の勉強とか、一日中お嫁さん予備軍のお勉強ばかりをしている。で、今日は調理実習。午前の三時間を使って全部、調理実習。

「なんか老人っぽい献立だよな」

「あー、私も思ってた、そうだそうだ、メインがないんだこのメニュー」

ピンクのエプロンはみんなお揃い、学校指定。白い三角巾も。でも今時三角巾なんかして飯作ってる女の人っているの？

「肉とか食べたい」

「えー、ダイエツト中だからあたし春菊だけでいいー」

「春菊つて不味くない？」

「来週煮魚やるんでしょ」

「げー、魚嫌いー」

ジャンクフードは太る、でも好き。そんな世代のあたし達に、煮魚はあんまり必要ない。パスタとか、ピザとか、そういうのの作り方が知りたい、別に家で作ったりはしないけど。

「咲、咲、咲ちゃん」

蓮根の皮を剥いていたら、隣の隣のテーブル班にいる千里が声をかけてきた。こんなにはつちり完璧な眉毛を描いてくる奴を、あたしは他に知らない。可愛いんだ、またこいつが。あたしが男だったら、きつとぶるぶる震えてる子羊ちゃんに見えて襲い掛かっていると
思う。

「気持ち悪っ、ちゃん、とか言った!」

「あんたがちつとも向かないからでしょ、今日空いてる?」

「空いて……る、あ、ない、あー、天気次第」

なにそれ、と千里が不思議そうな顔をした。

学校の調理室は油臭いような洗剤臭いような、古い鍋のような埃のような変な匂いがする。変だけど、ものすごく嫌ではないだろうか。非常勤のおばあちゃん先生は、真面目に調理をしたい娘だけを相手に、蓮根の灰汁抜き方法とかを教えている。でもそれは先生が

鼻肩してるとかじゃなくて、真面目な娘達　でもそういうのに限
って要領が悪かったり不器用だったりするんだよね　が教室の前
にある見本調理台の周りでわいわいと質問をぶつけたりしているか
らだ。

「天気次第つてなによ」

キャベツは手で干切った方が包丁の匂いが移らなくていい、なん
て坊さんみたいなのを言って、うちの班の娘がめしりめしりとキ
ャベツをむしっている。一班四人で、残りのふたりは春菊嫌いだの
ネギ大きくしないでだの、女同士なのに恋人同士みたいにいちゃい
ちやくつついていた。本物のレズは見たことないけど、こんな風に
べたべたしてるのの延長なのかな、そういうのつて。あたしはどう
せなら男とくつついてたいけど、タカちゃんはくつつかせてくれな
いからな、ちよつと切ない。

「雨が降ったら帰るけど、晴れてたら予定なしつてことよ」

「変なの、普通逆じゃない？」

ピンクのエプロン、あたしのは黄色いひよこちゃんが、千里のは
にゃんこちゃんがアツプリケでついている。アツプリケ。って懐かし
い、あんなの幼稚園の子供だけが使うものだと思ってた、アイロン
でぺたんつてくつついちゃって洗っても落ちなくて素敵。本当はエ
プロンにそんなものつけちゃいけないんだけど、先生達はなんにも
言わない。

タカちゃんにお味噌汁とか作ってあげようかな、とか思うけど、
あそこのアパートにはコンロが一個しかなくて、流しは狭いし包
丁はないし、鍋もインスタントラーメン作る用のちっちゃいのがあ
るだけで後はなんにも。フライパンすらないから、料理なんて「作
ってあげるのが夢！」で終わっちゃいそうだ。うちから包丁とか持
ち込もうかな、でもそうするとまな板もいる、鍋もフライパンも欲
しいしもちろん材料も持っていかなきゃなんないし、大体炊飯器な
いんだつた。タカちゃん家でご飯作ってあげるとしたら、あたしは
プチ引越しみたいなの荷物風呂敷に包んで背負って行かなきゃなん

ない。

ああでも、どうせだったらお風呂道具の方を持ち込みたいかも、だって洗面器がないんだもんあの家！ リンスどころかシャンプーもない、ボディソープと一緒に洗うからいいんだって言うけど、そりゃタカちゃんは良くてもあたしがね。まだ、タカちゃん家で頭洗ったことはないけど。

「咲ー、あーんして」

「え、蓮根白くない？ あーん、」

菜箸でつまんだ蓮根の薄切り……というか輪切りを口に入れられて、何も考えずに噛み砕く、じりじり水つぽくてなんだこれ。

「不味っ！」

「えー、灰汁抜きしたやつだよー」

「炒めてないじゃん、生じゃん、不味、げー、」

ぺっぺっぺっ、と三角コーナーに吐き出して、そう、うちの班の娘はちつとも料理が出来ない、多分やる気がない。いちやいや組が灰汁抜きしただけの生蓮根を吐き出しているあたしに向かって、ごめんね？ と言う。疑問系じゃ謝ってる誠意は見えないけど、みんなこんなもん。

なんでだろうね、料理って楽しいじゃん、理科の実験みたいで。でも確かに、好きな男にでも作ってやるんじゃないかなかったら、バカバカしいのかも、みんなで同じもの作って食べるのって。ハンバーグとかオムライスとか食べたいものならまだしも、春菊とか蓮根とかなんて。

あたしの身体がどうか敏感とか、頭痛持ちだったら良かったのにつて思う、よくおじいちゃんおばあちゃんが雨降る前に膝だの腰だのが痛いって言うみたい。そしたらあたしにも雨の気配が誰より早く察知できるのに。天気予報信じてるしかできないって切ない、他人任せみたい、歯がゆい感じ。雨が降ったらタカちゃんの家に行くんだ、路地裏のアパート、きつとつまんなそうにテレビ見てたりする。どうせ千里の「空いてる？」は、処女売りに行かない？

とかそういう類のもので、あたしは毎回断ってるけどちょっとしたのなら時々引き受けてる。千里と一緒にならって。カラオケ行ったり、お茶したり。知らない人の彼女の振りしたり。お金持ってる人の考えることってよく分かんない、あたしは千里の言う「バイト」を手伝うたびに、結局お金の力だけを信じてる人って所詮それまでだよな、とか思うだけなのに。まあ、そんなんで貰ったお金で、あたしはタカちゃんにお寿司をご馳走してあげられたりするんだけど。

雨が降らないかな、天気がものすっごく悪くならないかな、タカちゃんがアパートにいるように。いられるように。

「春菊を茹でる時は、茎の方からお湯に入れるんですよ。お水のうちに入れたら駄目よ、お水が沸騰してから、茎からですよ」

おばあちゃん先生がやつと質問攻めから解き放たれて声を張り上げた。んなの教科書見れば載ってんじゃん、と、教科書なんか持ってきてない千里が言うから笑ってしまう。

タカちゃんが春菊の和え物とか蓮根のキンピラとか好きなんだったら作ってあげてもいいけどな。

「咲最近付き合い悪いー、私とも遊べよー」

千里が文句を言う。私とも、って、いつもあんたと遊ぶときは別の誰かがいるじゃん、お金がらみで男ばっかの連れが。それに時代は中学生だよ、小学生だよ、そう言ったら彼女はにこーっと笑ってだからこれからおつきなくなったらますます私達売れなくなるんだよー、だって。なるほど。納得していいのかあたし？

「あー、クレープ食べたくなって感じ？」

「んじゃ食いに行こうよー」

「でもあたし、あんましお金ないよ」

この前タカちゃんに寿司奢ってピザも食べたし。それにここところいろいろ散財したし。マンガ買ったでしょー、アイプチ買ったでしょー、グロス買ったでしょー、ピアス買ったでしょー、服買ったでしょー。

「いい、いい、お財布連れてくからー！」

「うつわ、気前いいー！　っていうの、それ？」

膳は急げでもう行こうよ、と千里があたしのエプロンの紐を引っ張った。サボリだサボリ、遊びに行きたい時が吉日、善は急げ。分かりやすい千里の思考回路、あたしは嫌いじゃない。

「せんせーい、お腹痛いから保健室行つてきますー」

「あたし、えっと、森泉さんの付き添いですー」

一瞬千里の苗字を忘れててやばかった。

手を引っ張られてどっちが病人役なんだろうって分かんなくなりながら調理室を出る。ちっちゃな悪いことをするとすぐ笑いたくなる。きゃあきゃあと。誰かと一緒に。千里は制服のポケットから綺麗なスモークピンクの携帯を取り出すと、さっそく電話をかけた。もしもしチリだけどねえ、と語尾を甘ったるく伸ばして電話をする。友達も一緒だけど遊んで欲しいな、なんて、ハートマークが見えそうな甘えっぷりだ。

「なんでそんなに金蔓知ってるの？」

「え、彼氏が紹介してくれるから」

「援交斡旋？　彼氏？」

こつこつ可愛い彼女に売春させてる男つてのもどうなんだろう、不甲斐ないの？　大物なの？

「格好良いよー、今度紹介してあげたいけど、でも駄目、もったいなくて誰にも見せてあげたくないー」

「超ラブラブ？」

「うーうん、クールだよ、私がべた惚れ」

「いい男なんだ」

あつたりまえじゃん、と胸を張る千里は可愛い。さらさらの茶色い髪が肩のところを揺れて、いかにも青春、って感じがする。

路地裏のクマ・2 (前書き)

続きます。

自転車でうんとスピードを出すのが好き、暴走バイクみたいに、びゅんびゅん飛ばしてるとき、あたしは自分が悪い子になった気がする。悪格好良い子。サングラスとかかけたくなる、スカートが風にくれるのも片手で乱暴に、ちっ、とかって舌打ちして押さえつけて、男っぽく振舞いたくなる。

「そういう気持ちって分かるでしょ、なんかびゅんびゅーんって、タバコとか啜えちやいたい気分で」

「女はタバコ吸うな」

「ちっがう、そこちっがーう！ しかもなんで鼻履してんの、女はダメって」

「コグマ、それは鼻履じゃなくて差別だ、言うなら」

おバカでごめんね、と顔をしかめると、タカちゃんは鼻をちよつとだけ鳴らした。彼はあたしをコグマと呼んでいる。熊井咲、というのがあたしの名前で、名乗ったときに「えらいちっちえー熊だな」と言われて、ちっちやい熊は子供だからって、コグマだそうだ。でも咲って呼んでくれた方が嬉しいし、字数も少ないから簡単だと思っただけだな。それにクマなのはタカちゃんの方だと思う、見た目とか、見た目とか、見た目とか。

お外は雨降りであたしは学校帰りに直接彼のアパートに来た。タカちゃんはある日外を歩かないみたい、いつも仕事がない日はお家でテレビを見てる。あたしのこと邪魔だとか思ってるのかとたまに不安になるけど、なんにも言わないから多分そんなに目障りでもないんだろう、相変わらず手も足も出してくれないけど。ちゅうとかしようよ、って言っても、鼻で笑われるだけだ、くそう、年増好き あたしはそう思ってる、だって現役女子高生に興味がなさ

過ぎる！　め。

「女は子供産むからダメだ、タバコは」

さっきの話の続きをしていたらしい、部屋に転がっていたバレーボールマガジンをぺらぺらめくっていたあたしは、まだ会話が續いていたことに驚く。だってタカちゃん、会話のキャッチボール下手くそ、っていうか、いつも面倒くさがるんだもん。

「子供できたらタバコやめればいいじゃん」

「そういう問題じゃないだろ、タバコの害が身体から抜けるまでに二年かかるって聞いたぞ」

「誰から？」

「……誰でもいいだろが」

「むーう、じゃあ誰から聞いたのでもいいけどさ、あたし別にタバコ吸ってないもん、吸う気もないもん、タバコの煙大嫌いだし」

「ますます背え伸びなくなるしな」

タカちゃんはあたしより二十五センチくらい平気で背が高い。タバコは吸わないだって、別に美味しくないし煙に金払うのバカバカしいって、だからあんなにおっきくなったのかな。うちはお父さんがタバコを吸うけど、トイレがタバコ臭くされちゃってすごく嫌だ。制服とかに臭い染み付いちやうし、最悪。タバコなんてこの世から消えちゃえばいいのに、あ、でも男の人がタバコを吸ってるのはちょっと格好良いんだよな、どうせならタバコの煙に匂いつけちゃえばいいのに、苺とかレモンとか桃とかの。そしたらもっと売れたりしないのかな。

「じゃあタカちゃんはタバコ吸う女の人、嫌いな？」

「タバコ吸うっただけでは嫌わんよ、でもまあ惚れないな、少なくとも」

「すっごいいい女でも？　タバコ吸わなきゃ超好みで超理想でしかもあっちから好きとか言ってきても？」

大人になったらそう簡単に好きとか言い合わん、と、ズレた返事が放られた。面倒くさそうな声だったから、もう喋るのに飽きたの

かもしれない。

この頃天気が悪い日はタカちゃんの家に入り浸ってるから、彼はあたしの存在に慣れちゃった感じがする。あんまり慣れて欲しくない、緊張感がないときめかないから恋愛が進展しないって、恋愛科学の先生が言ったた、うちの学校の先生じゃなくて、なんか深夜の番組に出てる男の人、半分裸みたいな服着た女の人が二列に椅子にずらっと座ってて、その人達の前でホワイトボードとかで説明してて。その人が言ったた。だから結婚して時間が経つと、お互いが兄弟みたいになっちゃって、そこには信頼関係は生まれるけどときめきはなくなるんですよ、みたいなこと。信頼関係は愛って言い換えることができるんだって、ときめきは恋、だから、恋が死ぬと愛が生まれるんだって、でも、でも、じゃあ、恋愛って言葉はなんか変じゃない？

めくってたバレーボール雑誌は興味がないから何が面白いのかさっぱり分からない。中学の頃バレーやったな体育で、っていう認識くらいしかない、六人制とか九人制とか、タッチネットとかサービスクラとか、それくらいなら知ってる。

タカちゃんは趣味でバレーをしているのだという。中学と高校の途中まで部活もちゃんとやっていて、どうして高校が途中までなのかという中退しちゃったからで。高校中退ってすごいと思う、いくら馬鹿学校っていつてもあたしはやっぱり集団に属するのが楽チンで、そこから抜けて自由にやっていく自信はない。退学しちゃう人間は半分くらいが、ただ「かつたるい」とかで辞めちゃって結局親に養ってもらったり格好良くない生ぬるい自由もどきの中だったら生きてるだけかもしれないけど。でもタカちゃんは親元離れてちゃんと仕事してるし。すごいなって思う、あたしはまだ気楽な不自由の中で甘やかされてたい、いずれは世の中に出てかないといけないんだから、せめて今くらいは。

寝転がってテレビを見てるタカちゃんの背中が、あたしにお父さんを連想させた。あたしとお父さんはあんまり喋らない。お姉ちゃん

んと弟も喋ってるところをそんなに見たことがない。いつも横になつてテレビを見てる、その後姿しか知らない気がする。子供に興味がないんだろう、でもお母さんはいつもお父さんの悪口を言わなかった、少なくともあたし達子供の前では。別にお父さんが立派だとか、お父さんがいないとご飯が食べられないだとか、お父さんが働いてくれるから生活ができるんだとか、そういうことは言わなくて、本当はお母さんには許婚がいたんだけどお父さんがその家にもお母さんの家にも頭下げに行つて結局お嫁に貰っちゃった話とか、初めて買ってあげたプレゼントはネクタイだったとか、そんな話ばかりをしていて、あたしやお姉ちゃんはそのなこと聞かされても両親の結婚前の話になんか興味ないよ、と思つてたけどお母さんがあんまり楽しそうに話すからそれでお父さんをすごく嫌いだったりにもなれないまま大きくなった。

一度、台所に出しっぱなしだったお父さんの携帯を見ちゃったことがある。

千里と同じ機種だったから使い方は知っていて、なんとなしにデータファイルを開いたら裸の女の人の写メがあった。股開いてるのとか、あそこに指突っ込まれてるのとか、結合写真はなかったけど、突っ込んでる指はお父さんのだなんて分かった。だつて爪があたしとそっくり。指の割に爪が丸っこすぎる。相手の人はお母さんじゃなくて、若い人でもなくて、ちょっとおばさんっぽい、なんか美人でもない人だった。そういうお店の人なのか、お父さんの愛人なのか、ただシート真つ白だ、って、どの写メ見ても思った。うちのシートは全部柄もので、あたしのは水色に金魚がいっぱい泳いでるやつだ。

お父さん浮気してるのかな、お母さん知らないんだろうにな。

でもシヨックは全然なかった。へえ、することしてんだ親くらいの年齢でも、って感心したくらいだった。もつと取り乱したり不潔とかって思わないといけないのかも、って気もしたけど、お父さんはお父さんだし、あたしの旦那さんじゃないし。家族だから何、っ

て感じだった、あたしは冷たいのかもしれない。

だけとお父さん、他の女とかにお金使ってるんだとしたら、それよりまず先に、お母さんが欲しがってる電動自転車とか買ってあげればいいのに。

タカちゃんも女の人を抱いたことがあるんだろうな。

彼の背中を見ながら、そんなことを考えてるうちにすごく切なくなつた。急に、ものすごく。お父さんの浮気証拠には少しも動揺しなかつたのに。

タカちゃんの部屋は男くさい。汗とか体臭とか、わあ男！ っていうくらい煮詰まつて男くさい。あたしのコロンくらいじゃその匂いは中和できなくて、もっと大人の女の人が発する女くささじやないと太刀打ちできないのかな、とか思う。そういう人じゃないとタカちゃんに釣り合わなく思えてしまう。タカちゃんってあたしをどう捉えてるんだろう。変な女子高生、物好きな女子高生、意味不明な女子高生、うざりたい女子高生、誰だこれ。最後の、誰だこれ、くらいが一番当てはまりそうで怖い、誰だ若いことはそれだけで素晴らしい武器なんだなんて言つてた奴は、タカちゃんにとっての女子高生は意味がないじゃないか。

「……タカちゃん、帰るね」

「おお」

おお、って。テレビから目をそらすこともなく彼は適当な返事をする。あたしが放つた言葉の意味なんて考えてない、きつと、「結婚して」とか言つても「おお」って言うんだ、とりあえず。……なんかそれっていい考えっぱいな。

タカちゃん家を出る前に千里にメールした。返事はすぐにきて、あたし達は遊びに行くことになった、いいのがいるんだ、って千里が興奮気味に言つてたから、知らない男の人を交えてまた遊ぶんだろつな、そしてお小遣いを貰うんだろつな、タカちゃんが怒つたりしたらすぐにそういうことは止めるんだけど、あたしは話したことがないし、だからタカちゃんも怒らないまんまだし、それより彼が

そこまであたしに興味があるかっていうのが心配。どうせ怒られるんだっいたら一般的な大人が子供を倫理観がないとかって怒るのじゃなくて、自分を大事にしなさいとかって理由で男と女っばい怒り方してくんないかな、それは贅沢かな、ところでタカちゃんに倫理観とかってあるのかな。

千里は美人だと思う、小顔でこんな田舎に住んでるんじゃないで、渋谷とか原宿とかで遊んでるような女の子だったんなら、すぐにスカウトされるだろうにっ感じの。色も白いし、スタイルもいいし、目がまたでかいんだ、唇なんて舐みたいに真っ赤だし。可愛いな、ってあたしでもたまに見惚れる。可愛い、と、美人、が一緒になってる人間なんてそういない、横顔は美人、正面から見ると可愛い、なんて。

なんでそんなに可愛くて美人ちゃんなのに身体使ってお金稼いでるんだらう、って不思議に思うけど、本人はやりたくてやってるんだからいいんだ、と笑う。千里には生活費を出してくれている義理のお父さんがいて、その人にずっと頼ってるのが心苦しいから早く自分で稼げるようになりたいんだって言う。

「別にその人に悪いとかっていうんじゃないで、悪いってのもあるけどさ、なんか窮屈で嫌なの、分かるでしょ？」

本当のお父さんは千里がちっさい時に亡くなって、お母さんは再婚したけど千里が中学の時に亡くなった。義理のお父さんはお母さんにそっくりな千里を純粹にめっちゃめっちゃ可愛がったけど、その義理パパも再婚することになって、千里は亡くなったお母さんの実家に行くことになって。だって、義理パパについてっても、赤の他人と暮らすってことじゃん。だけど義理パパは千里のことを本当の娘みたいに可愛がってたから、せめて養育費は出す、不自由はさせない、って言うんだって。

「お父さん　義理のね　から貰ったお金、使ってないよ、おば

あちゃんが全部貯金してくれてる。高校なんか行かないで働き始めて、養育費はもういらないうすよーって言ってあげたいんだけど、高校くらいは出てくれって言うんだよ。お父さんが」

お父さん、と言うときの千里の目はちよつと優しい、と思う。でもちよつとつぎそうだったりもする。血が繋がってなくて、しかも一緒に住んでなかったりすると、接し方もあたしなんか想像する以上に難しいんだろう。いや、接する人によるか。

そんな千里は女が自立するにはまず男、と考えてる娘で、今まで付き合ってきた人はみんな十も二十年上ばかりだったって本人は言う。お金がある人がいいじゃない、そうすると同世代なんて全然ダメだし、でもお金だけって訳でもないし。千里が可愛い顔してそんなこと言うと、なんか結構きゅーんと心が痛くなる。不甲斐なくてごめんねー、って、あたしが謝りたくなる。

「でもね、啓ちゃんが自分で稼ぐこと教えてくれたの、あ、啓ちゃんって今の彼女ね、啓吾って言うの、私より十っくらい年上、仕事？ あー、なんかね、あんまし柄の良くないお仕事、ほら、テキ屋さんとかしたりもする、」

「えっ、ヤクザさん！」

「えーえー、でもよく分かんない、私がそう勝手に思ってるだけでも、それにもしもそうだったとしても、ほら、多分、下っ端だし、多分、うんうん、多分ね、あつ、スーツとか着ると格好良いんだよ、ジャージとかでも格好良いけど、啓ちゃんは袴姿とかも似合いそうなんだあ」

日本男児って感じなのかな。

極道の妻達、のテーマソングがあたしの頭の中で勝手に流れ出す、姐さん！ とかって叫んでみたくなる、あれれ、千里が姐さん？

でも千里は美人だから、どっちかっていうと崩れた感じの愛人になった方が似合うと思う、真っ赤なスリッパドレスとか着て。タバコ吸って。あたしのイメージって貧困。

「でも日本もさ、不景気とかいうのに私達と遊ぶのに金出したりす

る男もいてさ、よく分かんないよね、なんで税金とかって上がるの？ 国が無駄遣いしてるんでしょ？ っていうか、国ってお金発行できるんだったよね、いっぱい作って国中お金持ちにしちゃえばいいのにな」

「……そうするとインフレだかデフレだかつてのが起こるんじゃないのか？ うーわー、咲ちゃん久々に頭使っちゃったよ、社会科の教科書とかで遠い昔に読んだ記憶！」

「消費税上がるって？」

「なんか言ってたね、貧乏人から金取らないで欲しいよね、自作自演とかでのんびりした日本でやっていくとかさ、」

「自給自足、っていう言葉だったと思う、そういう時に使うのって、でもハイテク文化に慣らされたあたし達はきつとこのままのらりくらりと生きていくんだと思う、難しいことは頭のいい人たちが考えればいい、ゆとり教育って、馬鹿を増やして物事を深く考えないで、とりあえず先送りに先送りに責任とか持てませーん、分かんないって人間ばっかりで日本を埋め尽くすための計画なんですよ？ 結構成功してるよ、部分的、地域的に。」

駅前で千里と待ち合わせして、電車に乗って隣の隣の駅まで行く。その駅前は飲み屋としゃぼいゲームセンター 格闘ゲームの基盤ばかりが二列くらいに置いてある狭い店 とパチンコ屋がたくさん並んでいて、でもちよつと歩くと大きくて立派なゲーセンやカラオケボックスが今度は並んでいる。遊ぶため、娯楽のため、だけの街、みたいな。小学生の時からずっと、親や学校に「あそこへは子供だけで行ってはいけません」と言われているような場所。昼間に通るのはそう怖くないけど、夕暮れ時はちよつと怖い、日が落ちたらもつと怖い。道はおしつこの匂いがするし、酔っ払いがゲロしたあとがそこら中にあるし、やたらと大声で騒ぎ、酔っ払ってるなら何してもいいんだと思っていそうなおっさんとか、着飾ってるつもりなんだか派手で露出度が高いだけの目に悪そうな原色おばさん

笑っちゃうくらい太ってたりするんだこれがまた があたし

達を見て、ガキは帰れ！ って叫んだりして。ストレス溜まってんのかな。次の世を背負うはずのあたし達が頼りなさ過ぎて、見てると腹が立つんかな、とかって思ったりもするけど、しつけ方法間違った犬から嘸まれても文句は言えないんじゃないかしらね。

「クレープ食べたい」

「そういえばこの前からそんなこと言ってたよねー」

「男とかと遊ぶの、嫌だな」

「そう？ でもさ、男交えなくて、私と咲で何して遊ぶのよ」

映画見るとか買い物するとか、お茶しながらおしゃべりするとか？ 何して遊ぶのよ、なんて言われると、確かに何をしたいのか分からない自分に気付く。そうだよなー、遊ぶのって頭使う。一緒にいるだけなら学校でも会える。遊ぶって何？ 共通の趣味があるならともかく。

「でも遊ぶつたつて、」

ゲーセンのUFOキャッチャーで欲しくもない景品を取ってもらって喜んで見せたり、カラオケで聞きたくもないような歌を聞いてあげたり。するだけだし。車でのドライブはしないけど 走る個室なんて何されるかどこに連れて行かれるか 、電車で出かけるくらいはする。目的地があるわけじゃなくて、大抵いちゃいちゃしてるだけがいって言われる、知り合うこともないであろう他人に自分は高校生の彼女がいるんだ、みたいなことをさり気なく見せびらかしたりしたいんだらう、そんなのにどんな意味があるのか、あたしは知らないけど。

待ち合わせの時間を過ぎそうだから、と、千里が携帯で連絡を入れる。チリ、と名乗るのは、とりあえず偽名、なんだそうで、でもまったく関係ない名前を付けちゃうと覚えられないから、ちさと、の読み方を変えたんだって、でもあたしは千里にはチリって名前の方が元々似合ってるんじゃないかと思ってしまう。二文字でキリッと呼んであげたい感じがするから。

「あー、コーラ飲みたい」

「咲は食べたいものとか飲みたいものとかはつきり分かっていいよね、私最近ダメなんだ、啓ちゃんから何食いたい、とか何飲みたい、とか聞かれても、ぱぱっと答えられなくて」

「えー、あたしなんてその時の気分で適当に言ってるだけだよ、真剣に食べたいとか飲みたいとかかって、そんなんじゃないよ、いや、クレープは食べたいしコーラは飲みたいけど」

ちよつと遅れるね、と千里が切った電話は、いつものスモークピンのじゃなくて、シンプルな紺色のやつだった。プリペイドのだと、教えてもらおう。だって自分のマジ番号なんか教えたら何人相手しなきゃなんなくなるのよって、笑う。

千里は可愛いのに、千里の啓ちゃんはどうして彼女が他の男と遊んでお金を貰ったりするのが平気なんだろう。それが平気ってことは、千里に本気じゃないってことなんじゃないかな。あたしの考えは単純なのかもしれない、でももしタカちゃんが他の女と遊んでお金貰ってたりしたら、あたしはすつごく嫌な気分になる、絶対むつとしていらいらつとして、心がいがいがする。それとも啓ちゃんは千里が可愛すぎるから、自分になんか本気にならないだろうって予防線とか張ってるのかな。最初から傷付いておくの、あいつはあいう女だからって決め付けておいて、後で自分が傷付きそうになったら「ほら！」って。あー良かっただから最初から俺は言ってたんだよあいつはああいう奴だってさ！ みたいに。啓ちゃんは千里に本気になるのが怖いんだよ。そういう気持ちだったらあたしも分かる、あたしがお父さんに対して、嫌いじゃないけどでも最初から諦めてる感じで接するのと一緒にだと思っから、どうせ返事しないなら声かけないでおこう、とか、そういう風な。って、あたしは啓ちゃんって人、全然知らないんだけど。

そんなことを考えながら会った男の人達は、すごく印象が薄い人達だった。千里が先にお金を貰っておいてくれて、別に寝たりしないから五千円ずつだったけど、帰りにまた五千円ずつくれた。まだ若そうな、でも会社員って感じのふたり組だった、ゲーセン行って

ちよつとお茶飲んで、話して。全然楽しくないのに一万円貰っちゃって、こついうので甘い思いしちゃうと、世の中ちよるいって思っちゃうだろうな、って他人事みたいに考えたりもしたけど、夕力ちやんとご飯食べれるな、とも思ってた。

路地裏のクマ・3 (前書き)

続きます。

「えっ、それで何、勝手に家とか遊びに行ってるわけ？」

「勝手にじゃないよ、合鍵とかないし、タカちゃんが部屋にいるときだけ」

「うっそ、咲ってばやるじゃん、意外と。男とか興味ないと思ってた、あ、レズとかがって意味じゃなくてね」

「でもやっちゃってないよ」

「えーっ、えーっ、なんで！」

「知らないよー、興味ないんですよ、あたしに」

「でもでもでも、同じ部屋にいるんですよ？ 好きとか言っちゃってんでしょ？ なんでしちゃうわないの、信じらんない、インポ？」

「好きって言ったっけ、あ、言っていないかも」

「えー、でも分かるでしょ、意味もなく女子高生が自分の部屋とか遊びにきたりしないでしょ、インポじゃなきゃホモだよ、ホモ！」

「あのさー、人の好きな人をインポにしたりホモにしたりしないでよー」

「何で好きになったの、なんで？ なんで？」

「だから、目の前で車に轢かれても平気だったんだよ、で、すっごーい！ って思っで、惚れた？」

「顔は？ 顔、どんな感じ？」

「顔ー？ ええつとね、クマみたいな感じ」

「もっさいじゃん」

「もっさくないよ、別にヒゲ面とかじゃないし」

「プーさん系？ 腹プヨ？」

「プヨってない、筋肉質でいい感じ、だと思っよ、脱いだとこ見たことないから分かんないけど」

「芸能人で言うのと？」

「えー、分かんない、あたし芸能人とかあんま知らない」

「最近芸能人つてみんな女みたいな顔しててやだよーね」

「あー、あー、同感、あたしもつと目付き悪かったりオトコオトコした顔が好きだけど、最近のつてみんなぱっちり二重とか美白とかカマッぽくて嫌だ」

「へー、でも咲が恋してたかー、びっくり。やっぱ処女と違ってその人にあげたい？」

「あれつてあげるもんなのかなー、痛い？ あたし痛いの嫌いなんだよね、注射とかすげー嫌いだし、痛いならやりたくないなー、手とか繋いだりするだけでいいんだけどなー」

「そんな乙女チックなこと言つてないでよー、痛くないよ、ちゃんと後で気持ち良くなるよ、マジマジ、相手がすっごいでつかいとかなければ」

「ね、ね、ね、あれつてさ、本当に人によって大きさ違うの？ そんなに？」

「チンコ？」

「わー、ダイレクトだな、なんかそういう単語を千里が言うと、引く？」

「うん、ちょっと」

「えー、でもチンコはチンコじゃん。おっきさ違うよ、全然バラバラ。女だつてさ、オッパイの大きさ違うじゃん、人によって。そういうことじゃないのかな、でも面白い、でかきやいってもんでもないし。でかい人は私好きじゃないんだよなー、なんか自分のサイズに酔つてて、でかきや女は気持ち良いんだろ、とかつて絶対思つてるからさ、下手くそが多いもん、濡れる前に入れるなよ、とか、ちゃんと身体いじつてからにしるよ、とかつて、蹴っ飛ばしたくなる」

「一番大きかった人つてどれくらいだった？」

「トイレットペーパーの芯くらい」

「一番ちつさかった人は？」

「私の親指より、ちよつと大きいくらい」

「……結構差があるね」

「でも機能的には問題なければ、どっちでも子供作れんだよ」

「ああ、……ああ、そっか、そうかー、子供作るためのことだもんね」

「精子出すのと、おしっこするのと、ね」

「身長とかに比例するもの？」

「何が？ ああ、しないと思う、私が知ってる範囲だと関係なかったな。でも、普通の時とする時ってサイズ変わるんだよ」

「え？ なんで？」

「ふにゃふにゃしたまんまじゃできないじゃん、硬くなっておつきくなるんだよ、あ、でも変わんない人もいたな」

「変なの」

「うん、変だよね」

「女の人って、やってる最中胸のサイズとか変わらないでしょ？」

「なんでそう思うの？」

「え、なんでって、だって、そんな話聞いたことないもん」

「あー、まー、ね。でもちよつとは大きくなったりするらしいよ、目に見えないくらい、ちよつとだけ」

「えー、信じらんない。でも妊娠したら生理止まるんだよねー、それはいいなー」

「あれ、咲はアレ、重い？」

「重い重い、超重ーい、超うざーい、腹痛いし腰痛いし、マジで憂鬱になるよ。なんで生理なんかあんだろ、あつたとしてもさ、あんなに痛いのもってなんで？ 絶対生理中ってあたし、一度は思うもん、神様ごめんなさいあたしが悪かったです、いい子にするから！ っで。何に謝ってて、なにがいい子にするんだか知んないけど」

「私はそんなに重くないなー、三日くらいで終わるし」

「本当？ えー、いいなー、あたしなんかきつちり一週間だよ、な

んで？ 処女のが生理って重いの？」

「知らないー、あー、でも私、処女るときでもそんなにひどくなかったな。咲はその好きな人に処女もらって欲しいの？」

「うーん、でもタカちゃんしてくんないもん」

「して欲しい？」

「そりゃねー、でも痛い嫌いなんだよなー。って、さっきの話しなかったっけ？」

「え、忘れた。でもいいなー、処女なんてさ」

「なんで！」

「だって、好きな人にあげれるじゃん」

「千里は、処女あげたの好きな人じゃなかったの？」

「その時は好きだったけどさ、でも啓ちゃんのがもっともっと好きだから、啓ちゃんにあげたかった、って今は思う」

「ふうん、そんなもんかな」

「あ、でもね、処女あげられなかったけど、啓ちゃんだけ特別に生でしてんの」

「生？ ビール？」

「何の話よ、ビールなんか苦いだけだから嫌いだよ、違う、エッチのとき、啓ちゃんだけはゴムしてないの」

「……なんか違いがあるの？」

「えー、大有りだよー！……って言うてみたいけど、実は私も分かんない、でも啓ちゃんが気持ち良さそうだし、私もなんにも隔てない状態だから、もっとくつついてる感じがするし」

「……ゴムしないと妊娠したりするってことはあたしでも知ってる……」

「ん？ なに、そんな小声じゃ聞こえないよー」

「あ、あーあーあー、別になんでもない、でもいいなー、千里は。なんか、好きな人とやっちゃってるとかそういうのだけじゃなくて、なんとなく」

「うーん、いいかな、えへへ。でも先月からきてないんだよね」

「誰が？ 千里の彼氏？」

「違うよ、違う、きてないのは生理」

「なんだー生理かー、って、えええええーっ！」

路地裏のクマ・4 (前書き)

まだ続きます。

あたしだって今まで好きな人が一度もいなかったわけじゃない。

初恋は保育園の年中さんの時、隣のべにばら組だったコウモト君って子が好きだった。小学生の時だって、先生を好きだったり姉妹学級 年上の学年が年下の学年の面倒を見ましよう、みたいなのがあったの、六年生は一年生を、五年は三年を、四年は二年を、をそれぞれ面倒見る、ってのが のお兄ちゃんを好きだったり、同じクラスの子を好きになったり、生徒会長を好きだったり。あたしはどっちかっていうと惚れっぽい。でもお付き合いしたことは、中学生の時に一度だけ。学校から一緒に帰ったり、日曜日に会ったり、会っても駅前をぶらぶらするだけで何が楽しいのかよく分かんない付き合いだった。あの子、元気かな。ヨシモト君。垂れ目で猫みたいな顔だった、猫ってつり目のイメージがあるのに。キス、も、まだ本当はしたことがない、そっちには興味があるけど、でもいつ頃できるんだろう、相手が必要なことってあたしひとりの決心とかじやどうにもならないから不便。ひとりで頑張ったって、空回りすることもあるし。相手もその気になってくれないと、タカちゃんみたいに興味ないですオーラをばしっとな出してるともう、こっちはくるくるひとり空回りだもん、な。

夜寝る前にあたしはお布団の中でいろいろ考える癖がある。癖っていうのかな、いろんなことが勝手に頭ん中に浮かんできちゃう。ぐちゃぐちゃと。次の日には忘れてることもあるし忘れてないこともある。忘れちゃうことは大事なことじゃなかったから、って言う人もいるけど、そんなことはないと思う、だってお鍋を火にかけてぱなしで買い物に出ちゃう人とかは？ 大事なことじゃなかったの？ せっかく勉強した英語の単語とか文法とかを忘れちゃうのは？

必要なことじゃなかったの？

そうは思っただけでも大抵の考え事をあたしは忘れるけど。

一回寝ちゃうと過去のことだか現在のことだか、夢だったか現実だったかがぐっちゃになつて分からなくなる。助けて、あたし頭悪すぎるよ。それともみんなそうなのかな、安心しててもいいのかな。

そういえばヨシモト君と別れたときも、あたしから別れ話は言い出したのに哀しくて哀しくて家でわんわん泣いてて、そのまま泣き疲れて寝ちゃったら次の日起きてから別れてたことを忘れちゃって、忘れたっていうか夢の中の出来事みたいにほわわわーんって臆になつちゃってて、あたし別れたんだっけ、別れたって言おうと思つてたんだっけ、あー別れたんだった、哀しくて泣いたんだった、あの人はもうあたしの彼氏じゃないんだー、って思い出すのに半日くらいかかってまた哀しくて泣いた。

タカちゃんの家遊びに行ってるのも、夢の中の出来事だったりして。

月曜日。あたしは十二時近くまで布団でだらだらしてて、昨日の夜の考え事と今日のだから最中にぼんやりとしていたことが合わさって夢うつつ状態、そういえば千里になんか驚かされたんだよなー、と半分寝たような状態で思い出して。ああいう時、ちゃーんと思い出せると頭の中でパチンって音がする、もしくは力ちゃんって。ドアがちゃんと閉まったような、パズルのピースがちゃんとはまったような、そんな音。

「ぎゃー！」

思い出した。そうそう、生理がこないって、きゃー、それって！「えーえーえーえーえー、ど、ど、ど、どうしよう、どうするんだ、どうよそれ！」

自分のことじゃないのに胸が痛くなった、あのきゅんとするやつじゃなくて、ぎゅうぎゅう押しつぶしてる感じで。痛い痛い、息ができないっばい。

生理がこないって、それって、え、妊娠？

うちの学校は馬鹿学校だけど、妊娠騒ぎを起こしちゃう娘も年にひとりとかふたりとかはいるらしいけど、全部あたしの知らない先輩の話だし、噂でしか聞いたことないし、まさか実際自分の友達がつていうか、それって現実にある話？ ある話なんだ、でもなんで千里あたしに話したんだろう、ノリ？ 軽く？ そんなのちつとも問題だと思ってないから？ でもどうしよう、あれって相談だったのかな、打ち明け話だったのかな、墮ろすのってどれくらいお金かかるんだろう、千里お金はあるから大丈夫だろうけど、でもそれって、啓ちゃんさんの子供だよ、産むとかがってなるのかな、でもまだ高校一年生だよ！

「がばっ、と起き上がる。布団から。」

マンガ本とか化粧品とかが散乱した汚い部屋で、あー片付けなきゃ、とちよっただけ思う。

「っつて、違う！」

片付けはあと、千里の赤ちゃんどうしよう。

あたしが焦ったりしても仕方ないんだけど。とりあえず学校行って帰りにタカちゃんの家にも寄ろうかな、と、制服に着替えて、なんか食べようかなー、と台所に行ったらお母さんがいた。

「あら、咲！」

学校どうしたの、と聞かれて、今起きたとこだもんと答える。

「具合悪いの？」

「悪くないよ、どこも」

「咲も食べる？」

「え、何、ご飯？」

カップラーメンを食べていたお母さんが頷いた。昨日の晩ご飯の残りも出ている。白きくらげとタコの和え物と、コロツケと、ほうれん草のベーコン卵炒め。タコだけ指でつまんだら、箸で食べなさいと怒られる。

「女の子が手づかみで物食べちゃダメよ」

「手づかみじゃないじゃん、それに女の子がつてなに、男ならいい

わけ？」

「男の子も手づかみではあんまり物食べて欲しくないわねえ、そういえば」

お母さんが小柄だから、あたしはそれに似たんだろう。花柄のエプロンはあたしとお姉ちゃんが小学生のときに母の日か誕生日かのプレゼントであげたものはずだ。物持ちがいいなあ。

平日の昼間に見る家族って、なんだかいつもと違う感じで目に映る。生々しくて、そこに役柄なしで存在している風に。お母さんとか娘とか、姉とか妹とか弟とか、妻とか子供とかっていう家族の役割を全部脱いで、とりあえず身ひとつでそこにいる、みたいな。見ていて眩しい。ただただ、生きてる、って感じがして。違和感。でも嫌じゃない違和感。目を細めて見てしまう、この人ってここでちゃんと生きてるのね、って思う。

「ん？」

でもなんかそれとは違う違和感をテーブルの上に察知して、あたしは眉を寄せる。なんだろう、間違い探しをしている気分です。

「なに？」

「え、ううん、なんか、なんか、あれ？」

お母さんが食べているカップ麺と昨日の残り物三品と牛乳パックと、……違う、牛乳パックよりもっと背が低くて横に太い紙パックがある。デイリーワイン、とか書かれていて。

「って、えっ、お母さんお酒飲んでるの！」

「あらららら、見つかつちやった」

「えーっ、お母さんってお酒飲めたの！」

「大好きってほどじゃないけど飲むわよ、まあよく言うあれね、ストレス発散ってものかしら」

「お母さんにもストレスが！」

「そりゃ咲が知らないところでお母さんにだってストレスはありますよ」

でもカップ麺とワインってどうなんだろう。何杯飲んだのか分か

らないけど、別に顔色も変わってないし。もしかしてしょっちゅう飲んでたんだつたりして。しかも「ストレスはありますよ」って、ちよつと威張ったような言い方だったから笑える。

「もしかしてお母さんってタバコも吸う？」

「吸わない吸わない、タバコは吸わない、むせるから」

「吸ったことあるんだ！」

昔ね、と母がコップの中身をあおった。透明ってことは、白ワインか。

「あたしにもちようだい」

「ワイン？ やめときなさい、これから学校でしょ」

「……そういう理由なの？ 未成年だからダメ、じゃなくて？」

「あ、そうだった、未成年だからダメよ」

「遅いよ、今言ったって」

お母さんのストレスってなんだろう。お父さんかな、あたしとかお姉ちゃんとか弟かな、それとももつと他のことかな。

「ね、お父さんが浮気とかしてたらどうする？」

「えっ、お父さんが浮気？」

前に見てしまった写メを思い出して聞いてみたら、お母さんは驚いた顔になってしまった。そして考え込んだ顔になる。お母さん知ってるのかな、知らないのかな。考えながらも、ワインのパックから中身を上手にコップへ注いでいる。あたしはコロツケを親指と人差し指でつまんで口に運んだ。お母さんはもう文句を言わない。

「どうしようかしらね、今更離婚とかつてできないし、和美も咲も知弘もまだ学生だし、見てみない振りするかしらね、でもお父さんは浮気なんかできる人かしら、そうじゃないと思うけど」

「じゃあお母さんは浮気したいと思ったことある？」

話が飛ぶわね、あんたが酔ってるみたいじゃない、と、お母さんは一旦席を立ってあたしの湯飲み茶碗をもつてきた。お茶をいれてくれる。こういところってお母さんだよな、家族が何も言わなくてもお茶入れたり歯ブラシ買ってきたりするところ。

「別に浮気はしたいとは思わなかったわねえ、男の人の面倒見るのはお父さんだけでいいわ」

「面倒見てくれる人と浮気すればいいじゃん」

「あんだ、母親に浮気勧めてどうするのよ」

「そりゃそうだ。」

「じゃあさ、あたしが妊娠してたらどうする？」

「ガタン！」と椅子がひっくり返して、勢い良くお母さんが立ち上がった。

「咲！」

「わあ、違う違う、妊娠してないよ、あたしじゃないってば！」

「じゃあ和美？」

「お姉ちゃんでもない、っていうかお姉ちゃんに彼氏とかがいるのかとか知らないし、違うよ、例えばの話だってば、例えば！」

「……本当に？」

本当に。あたしはぶんぶん首がもげちゃいそうなほど頷いて、お母さんはびっくりした拍子に固まったんだろう怖い顔をほくしながら椅子を直した。

「……びっくりしちゃったわ」

「いやー、あたしもだよ！」

「例え話でもやめてちょうだい、いきなり」

はい、すみません。

「結婚とかはいくつでもいいけど、順番間違えるのだけはお母さん嫌だわ」

「順番間違わなきゃいいの？」

世間体かなー、あたしそういう考え方は嫌だなー。

「順番が違っちゃうと、纯粹じゃなくなっちゃう気がするからよ」
飲んでいるせいか、それとも昼間のせいなのか。お母さんはいつもより人間っぽい。ちゃんと考えを持っている、一人人として接しているような。

「子供ができちゃったから結婚しようとか、そういうのは纯粹的な結

婚じゃない気がしちゃうのよ。結婚の方がおまけみたいになっちゃうでしょう？ 子供がおまけって言うんじゃないけど。もっと結婚は、せめて後に続く日々が平凡なだけ、最初くらいはうんとロマンチックじゃないといけないのよ」

ダイニングテーブルにかかっている、ピンクの花柄ビニールカバー、そこに散っている小花を人差し指で撫でながらお母さんは言う。ロマンチック。結婚の後に続いたのは、平凡な日々でしたか。

「って、娘相手に話してもねえ。咲、あんた学校は？」

「だから、後で行くよ」

「後でとか言ったら学校終わっちゃうわよ？」

「行く行く、うんうん、あっ、 あー、行く行く」

「あんた好きな人とかいるの？」

「は！ 急に飛ぶね、話が」

「あんたくらいの時期が、お母さんにもあつたのよねえ」

「そりゃ、生まれたときからお母さんって訳じゃないだろうし」

いろいろ楽しんでおくのよ、と言われたけど、親にそういうこと言われるのってどうなんだろう。こそばゆい。恥ずかしい。照れる。なに言ってるの、って、突っぱねたくなって、なんか、そんな自分が子供じみてて嫌。

「あ、ワイン飲んだのは内緒ね」

「誰に？」

「お父さんと、和美と、知弘と」

「みんなにね」

「そう、みんなに」

キッチンドリンクとかお酒がないとやってられないわけじゃないんだからね、とお母さんは念を押す。たまに飲みたくなるだけよ、と言う。信じるも信じないも、だけどあたしはお母さんがお酒を飲んでたりするのに興味がないから、別に言わない。そんなことを話するほど、他の家族とべったり仲が良いわけでもないし。つかず離れず、みたいな、でも断ち切ったりはできない、みたいな。家族っ

てそういうもの。

家族が朝ご飯に食べたという黒糖ロールの残りがあったので、レンジでチンしてバターを塗った。ほうれん草の炒めたのも食べる。ベーコンと卵ばかり拾ったけど、お母さんは文句を言わなかった。

千里はもし妊娠してたら、誰に最初に言っただろう。

あたしだったら、相手の男かな。お母さんかな。お父さんは絶対ない。お姉ちゃんにも言わないと思う。あたしはセックスもしたことがないから良く分かってないんだろうけど、でも、もしも妊娠しちゃうなら望まれてがいい。お腹にできたあかちゃんだって、喜ばれた方が嬉しいに決まってるし。千里の妊娠は誰か喜んでくれる人がいるのかな。啓ちゃんさんが喜んでくれれば幸せなんだろうけど。

学校に行く前に、まだ台所にいたお母さんに行ってきますと声をかけた。うがいの数がいつもより少なかったのか、やたらと歯磨き粉のミントが口を動かすたびに香る。鍵を解除するときにはタカちゃんに会いたくなくなってしまい、あたしは学校とは逆方向に自転車を走らせた。

タカちゃんのアパートは路地裏にあって、道の向こうに小さな小さな中古車屋がある。五台ほど並べて止められた車には内側から百二十四だの七十八だのと数字が書いてあって、手書きのそれは捨て猫のダンボールに書いてある「拾ってください」によく似て見えた。タカちゃんの部屋は二階なので、窓から覗くとその中古車屋が見える。万国旗が何故だか電柱から電柱へとつながられていて、お客も見たことがないし、掘っ立て小屋みたいな事務所なんだか店舗なんだか、そこに誰かがいたのも見たことがない。

セーラー服のスカートを翻して、額に汗までかいて自転車をこいだけど、タカちゃんはやっぱいいなかった。今日は雨じゃない、仕事に出かけてるはずだから。分かっているけども腹が立って、腹を立て

るのは筋違いだと知っていても足が出て、あたしはタカちゃん部屋のドアをガンッと蹴った。鉄の重たい扉。いい音がして、足が微かに痺れる。

なんでいないの。

分かってるけど。

なんでいないの。

今、会いたかったのに。

タカちゃんはあたしの彼氏じゃないし、あたしがどんなに好きだと言っても相手にしてくれないだろう、だけど今会いたかったのに。友達が妊娠しちゃったかもしれないけどどうしよう、って。

タカちゃんはどんな顔するんだらうって。

驚かせるようなことを言ったら、彼はいつもテレビにだけ向けている視線をあたしへと少しは注ぐだらうか。

タカちゃんはヒーローだった。車に轢かれても死ななかつた、という無敵のヒーロー。あたしは女子高生らしい無神経さと好奇心でタカちゃんの周りをうろろしたけど、好きとか思ってみたりしたけど、どうも本気になりかけている気がする。今までの思ってた「好き」が嘘だったわけじゃないけど、あれはもつと。もつと幼稚な「好き」だった、今は違つて。あたしをちゃんと見るよ、って思う。腹が立つたりもする。あたしはタカちゃんを何も知らない。知らなくても「好き」は成り立つのか、そこも分からない。

中古車屋の前で、おばちゃん達が立ち話をしていた。あたしはその横をわざとすごい勢いを出して自転車で通り抜けて、おばちゃん達の文句を耳の後ろ、遠くで聞いた。うるさい。文句とか聞きたくない、あたしはびゅんびゅん自転車でスピードを出すのが大好きで、その邪魔をして欲しくないだけだから。

なんでいないんだよ、と風に紛れないような大声で怒鳴ってみた、届かないその声はすつきりさせるどころがあたし自身がどこか欠けてしまったかのような錯覚に陥らせて、意味もなく胸が痛んだ。

路地裏のクマ・5 (前書き)

続きます。

ギギギギキーキーギギギ、とブレーキ音が嫌な感じに響いた、自転車が停止する前に左足を地面につけて無理矢理止めたから、うんと焦ってる感じが出ていたと思う。

「タカちゃん！」

完全週休二日、というのは、公立学校のものだけなのね。うちの学校は隔週で土曜日も半日授業がある。いい天気だし、タカちゃんはきつと仕事だろう、と思っついても学校帰りに自分の家を通り越してアパートに向かっついたら。タカちゃん家を出たすぐのところの信号機で停まっついていた大きな車の助手席に、彼の顔が見えた。運転席を素早く見たけど、そこにいたのはひよろりとした男の人だったから安心する。

「どっか行くの？」

「わっ、タカ、お前なに女子高生と知り合っつてんの？」

喋ったのは運転席の男のほうで、タカちゃんは開いてる窓からあたしをちらりと見ただけだった。

「応援にきてもらえば？」

「はー？」

「いいじゃんいいじゃん、可愛いなー、セーラー服だよ、ちよつと本物の女子高生だ」

「信号青だぞ」

「いいっつていいっつて、おーい、彼女、」

タカちゃんと運転席の男が喋っつてる間に信号機が青に変わっつてまた赤になった。後ろに並んでた車が派手なクラクションを鳴らして抜かして行っつて、あたしはその間に息を整えていた。タカちゃんの乗る車の前と後ろ、黄色いランプが点滅している。ハザードランプ

だ、と名前を思い出し出していたから、運転席の男からの問いかけに少しの間気がつかなかった。

「あのさ、一緒に来る？」

今日はいいい天気なのに、タカちゃん仕事ないのかな。土日もある関係がないって言ったのに。

「おい、コグマ」

「わっ、なに、」

「コグマちゃんって言うの？」

「あ、違います、タカちゃんが勝手にそう呼んでるだけで、」

北体に行くけど暇ならこない？ 乗せてくよ？ と言われて、考えるより先に頭がこっくり頷いていた。自転車を道端に置いて、鍵だけちゃんとかける。

「おい、盗まれっぞ」

「うん、いい」

自転車をどこかに置いておいたら、その間にタカちゃんがいなくなっちゃいそうなんだもん。

北体 北部体育館 は市街地にある市立体育館で、自転車で行けないこともないけどここからならたっぶり一時間くらいかかった。ちやう。

「自転車も後ろ積んであげるよ、大丈夫大丈夫」

運転席からひよろりとした男の人が降りてくる。タカちゃんに比べると風が吹いたら飛ぶんじゃないかと思わせるくらい細くて、だけどその人は車の後ろを開けると自転車を軽々と掴み上げて入れたすみません、とか、ありがとうございます、とか口の中で転がしながら、あたしは助手席で前を向いたまま頬杖をついているタカちゃんばかりが気になってた。

怒ってるのかな。

なんであたしの顔見ないんだろう。

北体にあたしがついて行くの、嫌なのかな。

だったら口で言えば良いのに。腹が立つ。嫌なら嫌、良いなら良

い、口に出さないで態度で示すのってすごく嫌に気分になる。口に出せないなら態度にだつて出さなきゃいい。

あたしのこと、嫌いなのかな。

そんなそっぽ向いた態度されると。

心臓の近くがぎゅっと痛くなつたけど、やっぱりいいですつて言つて帰つちやおうかなつて思ったけど、その前にひよる男が後部座席のドアを開けてあたしを促した。タカちゃんの後ろ。スポーツワゴンってタイプの車だ、中古車屋に似たようなのが置いてあつて、そう書いてあつた気がする。自転車が横になつて、トランク部分にしっかりと納まつていた。居心地悪そうに。

「乗つて、ええつと、」

名前は？ と聞かれる。タカちゃんが、とちよつとだけありもしない期待をしたけど、もちろん答えてくれなかつた。

「……熊井、咲、です」

「咲ちゃん。可愛いなー、ま、ま、乗りなよ」

あ、オレ川本つて言うの、と言う男の声を遮つて、タカちゃんが低く唸るように「遅れるぞ」と言った。不機嫌なクマみたい。タカちゃんはあたしの心をざわざわさせる。いつからだろう、どうしてだろう、前はそんなことなかつたのに。もつと、大人をからかう女子高生つていうキャラクターで通せてたはずなのに。

川本、と名乗つたひよる男は、ミラーで何度もあたしと目を合わせて「可愛い」を連発した。安っぽい言葉だと思つたけど、ありがとうございます、を返す。車の中はゲーセンで手に入れたのだからうぬいぐるみが五つほど乗つていた。すべて手触りがいいやつで、大きさもそれなりで。茶色いウサギのを膝に抱いて、あたし何してるんだらう、と視線をタカちゃんの頭に向ける。

短い黒髪。汗っぽい、男っぽい、タカちゃんの匂い。振り向け、と念じてもピクリとも動かない。窓の外の景色はびゅんびゅん変わるのに、タカちゃんは動かない。動かない、動かない、動け、動かない、くそう、一回くらい振り返つたつていいじゃない、動け動け

振り向け振り向け、せめてなんか一言くらい。言っただっていいじゃない、学校帰りかとかまた俺の家に来るつもりだったのかとか。迷惑そうな声でもいいからさ。

「無視、が、一番辛いのに、」

呟いたけど聞こえないような声に自分でしたから、やっぱりそれは車の音とかに溶けて空気に紛れてしまう。

結局北体につくまでタカちゃんは何も言わなかった。

北部体育館は隣に市民プールまである大きなもので、だけど今の時期は屋外用なので使用不可になっている。夏場はすぐ賑やかだけど。二百円で一日中使えるし。水の入っていないプールは乾いているのに淋しい。淋しさは濡れていたり湿っていたりするものにはっかり感じるもののような気がするのに。雨とか涙とか、飲み残しで忘れられたままのジュースとか。

「バレーの練習してんの」

週一でき、と川本が教えてくれる。上履きに履き替えてくださいの張り紙があつて、そんなの持つてないよ、と文句を言いかけたあたしに、スリッパを出してくれた。タカちゃんはさっさと奥へ入つて行ってしまふ。あたしがついてきて、それで怒ってるなら口に出せばいいのに。なんだよもう、と、あんまり腹が立つと泣きそうになる。

「咲ちゃんバレーとか好き？」

「……学校の、体育の授業でやりましたけど、」

川本はあたしの泣きそうな気持ちにも気付かないで普通に話し掛けてくる。タカちゃんと似たような、紺色のジャージを着てた。白の三本ライン。

「タカも中高とバレーしてたっていうけど、オレもずっとやってて咲ちゃんも興味あつたら入りなよ、社会人サークルだけど、オレが言えば現役高校生でもいいからさ」

この人あたしの言うことちゃんと聞いてないな。どうして学校の授業でやったことがあるだけのレベルで、バレーに興味があるとか

って勘違いできるんだろう、しかも今、ちらりとオレ様発言した？
自転車を車に乗せてもらってるままだし、なにこいつ、って思っ
てもさすがに顔に出したら今はまずいだろ、と、あたしはにっこり
笑ってみせる。でもあたし運動神経悪いし、って言ってみる。

「大丈夫だつて、オレがちゃんと教えるし」

だから、バレエなんか興味ないって暗に言ってるだけなんですけ
ど。

「タカちゃんに怒られそうだからいいです」

「そういえば咲ちゃんって、タカとなんの知り合い？」

茶色いビニールの安物つぽいスリッパの中で靴下の足がつるつる
するから、歩いてるんだか滑ってるんだか分からない感覚になる。
パタン、パタン、と体育館に続く通路を歩く、川本の後ろをついて
行つて。千里と遊んでるとき、よくこういう人いた。興味のない男
の人とかと遊ぶのつて、昨日のことでも一時間前のことでも一分前
のことでも、全部ものすごい遠い過去のように思える。

「順ちゃんはまだ小学生つくらいのはずだし」

「……じゅんちゃん？」

「関係者？」

「……は？」

じゅんちゃんとか関係者とかつて何、と口にする前に、大きな鉄
の扉を川本が開けた。廊下壁の途中にいきなり出現したやつで、ブ
ルーの大きなBの字が書かれている。ギイイイ、と結構大きな音
がして、それが耳に収まったらすぐに室内のざわめきが流れてきた。
天井が高いからだろう、バシーン、バシーン、とボールが身体に接
触する音が響いている。掛け声と笑い声と。明るい室内。青春映画
のワンシーンのような、オレンジ色の空間。

「川ちゃん、それ彼女ー？」

声が飛び込んできた。え、あたしのこと？ 違うよ、なんでひよ
ろ男なんかの彼女じゃなきゃなんないのよ。

「違う、タカの知り合い」

「えー、女子高生じゃん、制服着てるー！ タカの知り合いー？
ちよつと、出会い系とかで知り合ったとかじゃないでしょうね」

本人目の前にして出会い系とかって失礼じゃない？ む、と思つて睨んでやった。化粧っけのない若いんだかおばさんなんだかいまいち分かんないような、髪短い女の人。真面目にスポーツやってます、って風に、短パンに白い長袖シャツ、膝にサポーター。バレエコートが張つてあつて、青と白と黄色の三色からなるボールがぼんぼんと空を舞っている。普通のバレーボールより大きい気かけする、男女混合みたいだし、もしかしてソフトバレー？ 女の人四人と、男の人がひとりと、タカちゃんと。

あ、つて思つた。

タカちゃんが。

笑つてる。

「順ちゃん？」

またその名前が出た。

「まさか」

タカちゃんが答える、すぐに。あたしの喋りかける言葉には、なかなか返事をしないくせに。

「あいつはまだ小三」

「えー、もうそんななんなの！」

体育館の中は広くて、ネットで仕切つた向こう側ではバスケットをしているチームがあつた。大学生くらいかもしれない、背が高い人がぞろぞろと。パス練習とかしてる、十五、六人くらい、もしかしたらもつといっぱいいいるかもしれない。ネットで仕切つてるだけなのに、音も声も遠い。

「あれ、十歳つて小三だよな？」

くるくると目を動かして、考えてる顔をするタカちゃんの。声が、澄んでて面倒くさそうな音を持ってない。

誰。

それ、誰。

「七歳で入学じゃないの、四年生よ」

どこかの子供の話？ 胸がざわざわする。妹とか、弟とかの話？ 十八歳くらい年の差？ まあそれもありえるよね、ほら、お母さんが違うとかで。

ざわざわ。そんなのより、なんでタカちゃん、笑ってるの。につこりして、なんでそんなやさしい顔してボールとか渡してるの。

「咲ちゃん、」

川本があたしを呼ぶ。うるさい、って顔に出さないように、いつもは絶対にしない「努力」ってやつを身体の底の方から持ち上げてくる。こっちで見なよ、とか、参加したかったらメンバーに予備ジヤージ借りてあげようか、とか、そんなの今言わなくていいから、ちよつと放つといて。

タカちゃんが、あたしに見せないような笑顔を。その人に見せて、それが結構ムカつくんですけど。

「……これ、普通のバレー、って聞くのっておかしい？」

「ん？ ああ、ソフトバレーだよ、だから男女混合。お遊びだけど一応リーグとかにも登録してるし、女性軍はみんなママさんバレーもやってる人達だから、結構いい線いってるよ」

「ママさん、ってことは、みんな既婚者？」

あーあーあー、恥ずかしい。なんの確認、なにを聞いてるの、あたし泣きそうな顔してない？

「うーん、離婚者、もいるけどね。あ、オレの奥さんとかってのはいないから」

離婚者、っていうのは、今フリーってことよね？

え、だって、タカちゃんの家には女の影がなかった。大体、彼女とかがいるんだったら、あたしが上がり込めるわけがないでしょ？ そうでしょ？ タカちゃんは女とかに興味なさそうだよ、高生、じゃなくても、女子、に興味がないってことだよ、笑ってるのとかって、バレーが好きで仕方ないから笑ってるんだよね、同

じメンバーの前だし、そういうのって同士、とかって言うんだよね、あたしが毎シヨートを前にすると顔がにやけちゃって仕方ないのと同じ意味だよ、ね？

「離婚者、って、」

いきなり初対面の人にこんな突っ込んだこと聞くのはマズイかな、不躰かな、って考える余裕もない。川本はもちろん気にする様子もなく、あの人、と簡単に教えてくれる。

あの人。

タカと喋ってる髪短い女の人いるじゃん、あの人。

って。幼稚園の娘もいてさ、なんて、個人情報も付け足してくれ

る。「タカちゃんが、にやけてる……」

「あ、咲ちゃんが見ても分かる？ あいつって普段仏頂面だから、ああいう時って露骨に分かるよな。由美さんもまんざらでもなさそうだし。バツイチ同士でくっつけ、ってみんな思ってるんだけど、タカが晩生でさ」

「……バツイチ？」

誰が？

何が？

あたしが混乱してる、耳の奥でぐるぐる思考が洗濯機みたいに回ってる、酔っちゃいそうな高速回転。

「バツイチ？」

あれ、知らなかった？ なんて川本が。知らないよ、あたし、タカちゃんの何も知らない。

「オレ、実は高校の頃からタカと一緒にでき。ここのサークル作ったのもオレとタカなの、あいつもバレー部だったんだけどさ、高三の時に付き合ってた十っくらい年上の女孕ましちゃって、そのまま結婚したんだよねー。責任感強いけど、考えなしじゃん、結局一年くらいで離婚して」

こういう話を本人以外の口から聞くのって、ズルしてるみたいで

吐き気がする。そんな、潔癖なことを言える人間じゃないけど。なにそれ。え、じゃあ、さっきの順ちゃんとかってというのは、タカちゃんの子供？

それはまだいいとして、え、タカちゃんがその女に笑いかけてるのって、好き、とかって、気持ちがあつて、ってこと？

あ、だからあたしの誘いに乗らないんだ、あたしの存在が気にならないんだ、あはははは、って。

それは。

えーっと。

……あー、ちょっと吐きそう、今。

あたし、失恋したとか？ そういうこと？ いくら相手にされてないって分かってても、それって時間が経ったりあたしが成長したりすればなんとかなったり、タカちゃんがいつか心動かされたりとかって、勝手に思ってたんだけど。

バシーン、バシーン、とボールの響く音がする。

「川、川、いつまでもくっちゃべってないでアップしろよ、時間勿体ねーよ」

タカちゃんが川本を呼んで、あたしはよろよろした足取りで壁際に後ずさる。何歩も下がって、背中が硬い壁にぶつかって。ヤバイ、うっかり泣きそう。背中を壁にすりながらへたり込んで、あとはぼんやり見てた。タカちゃん、あたしと口きかない。あの女の人の存在があつたから、川本があたしに「タカの彼女？」って言わなかったんだ、ってこんなことばかりひらめきのように分かっちゃって、最低だった。タカちゃん、あたしを見ない。そっか、あたしの存在は邪魔なのよね？ 下手に由美さんに誤解されても困るから？

それとも、あたしの存在なんかなんの障害にもならなくてゴミにしか思われなくらい、タカちゃんとその女の人の関係は結構強いのかな。

目の前真っ白、ってこういうのか、なんて、余裕なかった、本当に真っ白だった、体育館の、運動してるって感じの匂いがあたしを

取り囲んで、動けないようにさせてる気がする。その匂いだけが、運動をろくにしたことのないあたしを拒んでるんだっただけだ。いいのだけど、本当の居心地の悪さは、タカちゃんのせい。由美さんって人のせい。タカちゃんを好きで、彼の過去を人伝えに勝手に聞いたやったりした、自分のせい。

わたしもこういう制服着てたわ、って。

由美さんが。

鼻低いしそばかすだらけだし、目は大きいけどそれだけだし、美人じゃないじゃん、おばさんじゃん。

女子高だったの、って川本が言ったら、タカちゃんが何十年前の女子高生だよ、って笑った。あたしを見ないで、由美さんの方向いで。笑った。由美さんが怒った風に、何十年ってなによ、ってタカちゃんをぶって。その振り下ろされた右手がすごくやわらかそうにタカちゃんに触れたのを見て、あたしは身体の奥がぎゅうううと熱くなった。嫉妬、だった。

天井には飛行機が突き刺さってる。壁にはアメコミ調の女の人が描かれていて、お尻がぼーんつと、胸がぼーんつと、腰がきゅううってなあって、実際にいたら怖すぎるけどでもいわゆる峰不二子体型で羨ましかったりもする。胸はそこそこあっても、寸胴のお子様体型なんだよな、あたし。

「はじめてだったんだ、」

って、怯えたような嬉しそうな声は川本のもので、ラブホテルにしては珍しいんだっていうクイーンサイズのベッドにあたしは薄っぺらい布団に包まって横になってる。素肌にシーツ、ああ、こんな感触だったんだ。

トレーニングルーム、と名づけられている部屋は広くて、サンドバックと腹筋マシンが隅の方で居心地悪そうに置かれていた。三時間休憩五千八百円が、高いのか安いのかあたしには分からない。

川本が上手だったのか下手くそだったのか、それも分からない。ただ、千里が言ってた、トイレットペーパーの芯の人よりは大きくなかったし、親指よりちよつと大きい人のよりは大きかったと思う、あんまりよく覚えてないけど。

セックス。

って、結構拍子抜けだった。

バレーの見学をさせられて、タカちゃんがずっと由美さんを見てたりその目がすごく優しくかったり、うんとやわらかい声で笑ったりするのが視界に入っているのは、壁でもゴミ箱でも蹴っ飛ばしてやらないと気が済まないくらいにイライラすることだった。イライラして、でも同時に切なくなつて。あたし、タカちゃんのこともしかしてすごく好き？ とかっと思って泣きたくなつて。ねえ、それ取らないで、それ触らないで、あたしが好きだから、好きでいるからタカちゃん、あたしを見てよ、あたしにもそうやって笑って見せてよ、って。叫びたくなつて、それを我慢すると喉の奥に熱い固まりがぐぐぐつとせり上がってきて、鼻の奥で鉄っぽい匂いがした。泣くの我慢してる子供の気分になったから、多分あたしの唇は捻じ曲がってたと思う。帰りたい、と何十回も何百回も心の中で呟いて、トイレに逃げちゃおうかな、お腹痛くなつたから帰りますって言うかな、って頭の中でシュミレーションしてよし帰ろう、よし帰ろうって何回も自分に言い聞かせたのに、あたしの足は歩き方を忘れてしまつていて動かなかつた。

他の女の人に笑いかけていても、そこには動くタカちゃんがいたからかもしれない。

あたしの知らないタカちゃん。背を向けてテレビを見ているタカちゃんじゃなくて、無表情でお寿司とかピザとかデリバリーの間を食べてるタカちゃんじゃなくて。ナイスアタック、とか、ナイスレシーブ、とか、ナイスサーブ、とか、そんな掛け声が飛び交う空間で生き生きと動いているタカちゃん。彼はバレーが上手なんだろう、ボールをちつとも落とさないし、仲間がいるところへ上手に拾

い上げるし、相手のコートにさらりと叩き込んだりする。格好良い、って、あたしがぼややーんと思ってしまうほどに。

結局二時間ずっとバレーの練習風景をあたしは見ていた。壁に背中をつけて。タカちゃんをずっと見てた。そしてどうしても視界に入ってくる由美さんが邪魔で仕方なかった。二時間もタカちゃんを見てたのに、ちっとも飽きなくて、ああ好きなんだな、って確認する。再確認。噛み締めるように。

それなのに帰り、タカちゃんは由美さんと帰ってしまった。彼女の車に乗って。川本はあたしの自転車を車に積んだまま、助手席に座らせたあたしに「どこか行きたいところある？」って聞いた。行きたいところ？ タカちゃんのところ。あー、でもそれは無理で、このまま家に帰ったら泣くだろうなあ。って、そう思ったら帰りたくなかった。行きたいところ、タカちゃんのアパート。そう言ったら川本は、あはは、と発音はつきりと笑っただけだった。で、腹が立って、じゃあホテル、って。言っちゃって。どうしてああいう時って変に意地張ったようになって、そんなことなんでもないもん、って、ちよつと悪ぶった感じでホテル行こうよとか言っちゃうんだらうね。あたしがひねくれ者なのかな。

川本、あはははは、ってまた笑うかな、って思ったのに、笑わなかった。

短い沈黙の後で、それって本気にしちゃうよオレ、って言った。本気とか。

なられても困るんですけど。

冗談ですよあはははは、って、笑っちゃえばよかったのにタイミングを逃してた。タカちゃんに対する当て付けもあった。彼には痛くも痒くもないあたしの攻撃。そっちが興味見せないんだったらあたしだって他の男のところに行っちゃうもんねー、って。無駄だとどこかちゃんと納得しながら。

車の助手席で、川本が話し掛けてくるのに適当に返事をしながら、楽しそうな顔ができなくて窓の外をずっと見てた。ガソリンスタン

ド、スーパー、民家、本屋、古本屋、民家、民家、民家、コンビニ、そんなものが街路樹や歩行者や自転車の人を混ぜ込みながら通り過ぎていく。あたしの自転車が後ろでカタカタ音をさせていて、こんなとこまでつき合わせてゴメン、って、そう思った。頭悪い持ち主でゴメンね。

しばらく走ってからついたホテルは、大きくてピンクとブルーの変な色で彩られていて、う、って一瞬思ったけど車で入っちゃったら意外と中は普通だった。トレーニングルーム。そんな名前の、変な部屋。セックスするためだけにあるはずなのに、トレーニングマシーンが置いてあってプレステが置いてあって、カラオケもできてお風呂はジャグジーで無茶苦茶広くて、冷蔵庫にはご自由にどうぞ、ってカップラーメンがふたつとコーラとジンジャーエールとウーロン茶とオレンジジュース、ミニサイズのチョコとキャンディーがふたつずつ入ってて、電気ポットとインスタントコーヒー、紅茶のティーパックまで置いてあって、すごいと思った。トイレには、ナプキンと紙のショーツまで置いてあった。いきなり生理になっても大丈夫なんだね。

セックスに対する好奇心がなかったわけじゃないけど、自分が実際にするのはもっと年取ってからだと思ってた。高校生で処女なんて恥ずかしいとか、そういう風潮は確かにあるけど。でもあたしは痛いことが嫌いだし、セックスって大人がするもののような気がしてたから。あたしは大人じゃない。

部屋の探索が一通り終わって、ベッドに跳ね込んで腰を下ろす。先にそこにいた川本が、ゆるゆると手を伸ばしてくる。肩に触れて手が、制服越しなのにすごく熱を伝えてきて、あたしは緊張する。固まる。川本がちょっと不思議そうな顔をして、あたしの前に回りこんでくる。あ、肩に手を置かれたら相手の方を向かなきゃなんなのね。上半身だけ、にゅ、と曲げてあたしの前に顔を出してきた川本の格好は、お尻が突き出でて笑えたけど、これも笑っちゃいけないとこなんだろう。こういう手ほどきみたいなのこそ、学校で勉

強ささせてくれればいいのに、いきなり本番ぶつつけなんて嫌だ。まあ、三十二人の一クラスで、みんなが板書されたセックスのやり方なんか目やりながら、『相手が近付いてきたときにはそっと目を閉じます』なんてやってたら爆笑しちゃうけど。『はい、では隣同士ちよつとやってみてください、右側の人が肩に手をかけて、左側の人が目を閉じて』とかって。

「咲ちゃん、」

あつ、本番中だった。

川本が目を半分瞑ったような状態であたしに顔を寄せてくる。キスか？ キスだな？ …… あたし、なんでこの人とキスしてるんだろつ。

するんならタカちゃんとかいい、とか微かに思いながら、なんであたしはここにいるんだろつ。ここで、川本を両手でどついたら、キスとかしなくてよくなるのかな。でも好奇心が欠片もないわけではなくて。迷ってたら自分が目を閉じるタイミングを逃しちゃって、唇が重なってくるまでばつちり瞼は上がりっぱなしになってた。

重なる、唇。

ぶに、つとした感触で、意外と弾力があるというか硬いというか。でもくつついたのは唇だけじゃ足りなくて、川本の舌が、急にぬるりとあたしの口の中に入り込んできた。ノックもなしで、え、え、え、とあたしは焦る。どアップで見えてる川本の顔、肌の色、今から目を閉じたら全部嘘になったりするの？ 歯とかくすぐって、あたしの舌を探し出してきて撫でて。あたしがキスで頭をいっぱいにして、どどどどどとするの、とかって思いつつもそれを悟られたくなくて平気そうな振りをしている間に、川本はこっちの腰に手を回して自分の体重で押さえ込むようにあたしをベッドへゆっくり倒した。ばふ、と。ベッドが弾む。

「まっ、」

待って待って、の声が出そうになりながら、とりあえず川本の頬を両手で包み込んで押さえた。

「……なあに？」

うわあ、語尾が甘く溶けてる！

好きヨうふふ、の意味じゃないから、この両手は！

「咲……可愛い、」

呼び捨てにされてるし。

えー、一回寝たくらいで彼氏面しないでよー、っていうのはたまに聞くけど、本当はキスしたくらいで彼氏面ってできちゃうもんなんですか？

おでこから毛先へあたしの髪を梳きながら、川本が目を細める。頬を寄せてきて、すりり、と頬と頬をすり合わせる。猫、とかだと思えばいいのかもしれない。でも思えない、こんなでっかいの。喋るし。猫耳、ないし。ついてても怖いけど。

と、頬に気を取られていたら太ももが撫でられた。え！ と驚いて思わず腹筋使って半身を起こそうとしたけど川本が乗ったので無理でした。スカート！ スカートって無防備、男の手の進入を阻んでくれない。撫でられる肌がぞわぞわする。でも、変な感じもある、お腹の底の方がぐぐつと持ち上がるような。熱い塊がゆくりと移動するような。なに、これ。

可愛い、と口にしながら川本は顔を寄せてくる。露出している首部分だとか、頬だとかに唇を押し付けてくる。乾いた感触。舌が口の中に入ってきたときみたいなの、ぬるつとした感じはない。唇が薄いからかな、と思う。

あたし、このまま川本にやられちゃうのかな。

状態はこんななのに、まだ現実感がなくて曖昧で。

目を閉じて、タカちゃんだと思おうとしたけど、手の厚みとかが違うって無理だった。結構想像力ってないなあ、でも無理なものは仕方がないし。逃げる気もしない、そこまで危機感もない、この時間が終わったらあたしは処女から非処女になるだけで、ただそれだけで。でも、大人の女が好きだというのなら、タカちゃんは非処女になったあたしにだったらちよつとは興味を持ってくれるのかな、

由美さんがいるから結局ダメなのかな、なんて、そんなことを考えてた。

肌がむずむずする。

撫でる手が熱い。

川本はきちんとゴムをつけたみたいで 硬くなったものを触らせてくれた、熱くてびっくりしたけどこれがあたしの中に入るのって意味が分からなかった、千里の言ってた「生だと違う」の生もしてみたいな、と思ったけど、川本とするセックスは子供を作るためではないから、ただのエッチだから、口には出さなかった。痛かったのとか、あんまりよく覚えてない。夢中だった、早く終われ早く終われ早く終われ、って。入ってきたとき熱かった、こじ開けてる！ っって痛みがあったのは確かだったけど、あたしは入っちゃってから川本が腰を動かし始めた時のが嫌だった。

「……はじめてだったんだ、」

「うん」

シートに血はつかなくて、処女は初めてのときに血が出る、って聞いていたから生理くらいの量かな、って想像してたから拍子抜けで、でもあたしのおそこを拭いてくれた川本はそこに血がついていたからびっくりしたみたいだった。

「……ええっと、さ、あの、」

裸のままあたしは天井を見上げる。オレンジ色で塗りつぶされていて、うちのよりちよっと高い。素肌にお布団の当たる感触。ブラジャーはショーツとお揃いの薄緑と白のチエック柄で、お気に入りのやつだった。どうせなら。タカちゃんに見せてみたかった。川本の次じゃ失礼な気がする、タカちゃんの時じゃあもっと可愛いものを選んでおかないと。

タカちゃんの時って。

いつか、そんな日が。

「そっか、はじめて……」

「……別に気にしないで下さい、はじめてはじめて、って、バカに

されてるみたいですから、」

「あつ、そんな訳じゃ、いや、ただ、そのつ、……大事にするからね」

「……はい？」

今時の高校生って経験早いんでしょ、とか言われると思っていたところに、予想もしてなかった言葉がきてしまった。

大事に、って、処女としちゃったことの思い出とか、血のついたティッシュ……いやまさか、なに、大事にするって、もしかして、え、それってもしかして。

「……今日会ったばかりの男と、ってちよつと引いてたところもあつただけど、咲ちゃん本気だったんだ、オレ、君のこと大事に……」

「あの！ ちよつと！ ええつと！」

大事にするとかって、話飛躍させられても。

この男はあたしと付き合いたいとかそういうことを言ってるのかしら、それとも既にそんな段階は通り越して大事にされてしまう方向で話が進んでるのかしら。あたし抜きで。そんなのは困る、断じて困る。遊びだったんです、とは言わない、だって遊べるほどのレベルにないし、こつちが。あ、でも火遊びってんなら当てはまる言葉かな、いやむしろ当て付け？ タカちゃんがあたしに興味持つてくれれば、川本なんかと寝ることになんかならなかつたのに、そうだよあたし、今もう処女じゃないんだよ！

処女じゃない。

千里と話したのに。

タカちゃんにもらってもらいたいかなー、って。

処女って、もらうとかあげるとかの問題じゃないんだろうけど、でも、最初はやっぱり好きな人としたかったかな、って、今頃になって思う。そして、今頃急に自分が汚れちゃった気持ちになって、途端に焦った。じわじわじわ胸のところでなんかくすぶってる、嫌な感じ。カンニングしてテストで普段よりめっちゃめっちゃいい点取っちゃったような、ロールプレイングのゲームでレベルの高い友達

路地裏のクマ・6 (前書き)

あと少し。

非処女になっても空の色は変わらないし教科書の重さも変わらない。一晩寝たらいつもと違って、経験してしまったことが色濃くなっただけ、別にレイプだった訳でもないし。

処女がセックスするたびに股になるってどこかで聞いた気がするけど、あれは一過性のものかな。ずつとだつたら困る、でも世の中のある程度まで年取った女の人達がすべてに股っていうんじゃないし、あたしの歩き方だつて多分普通と一緒にだし。

自転車に乗ったら、サドル部分があそこに当たつて一瞬変な感じがしたけど、そのうちその変な感覚のほうが目立たなくなる。

千里にご報告だな、非処女になりましたでも相手はタカちゃんじゃないの、って言って、と考えて、相手は……のところ自分で引つかかる。う、って胸に刺さった痛みが。セックスを経験しても大人になつた感じはちつともしない、ダイエットと一緒に昨日今日結果が出るもんでもないのね、千里に化粧の仕方とか教わるのかな、雑誌とか見てもいまいち分かんないんだよね、そんなに化粧道具だつていっぱい持つてるわけじゃないし、お母さんとかお姉ちゃんに教わるのはなんか照れくさいし、大体「若いうちしかすつぴんでなんていられないんだから、化粧するなんて勿体無い！」とか言われるの嫌なんだよね、じゃあ若いうちは汚い顔でいてもいいってことかよ！　って思っちゃう。

登校時の自転車時間はいろいろ頭の中に浮かんで面白い、そういうのが面倒な時期　生理周期と関係があるんだって保健体育でやった、ホルモンバランスが崩れるらしい　はMD聴いて行ったりするけど。本体はおるかイヤホンまでピンク色した可愛いやつ、一

昨年のクリスマスにお父さんに買ってもらったやつ。お父さんってお金出してくれるときにしか興味なくて可哀想かもしれない、扶養する家族がいなかったらもっとお父さん、自分に使えるお金も増えるだろうにね。

びゅんびゅんびゅんつと自転車を漕いで、風を切って学校に向かう。

きつと、千里と喋れば頭の整理がついて、あたしが処女じゃなくなっちゃったことや川本の前で泣いちゃったこと、タカちゃんに好きな女がいるらしいことや、それどころか離婚暦あり子供までいたこととか、すんなり自分の中に収まるかもしれない。口に出すと考えてることより明確になって、喋ってるうちに問題の解決方法とかが頭に浮かんできちゃったりすることもあるし。アドバイスをくれるくれないにしても、相手がいないとあたしは自分の考えがまどらないんだよね。みんなそんなものかと思ってたら、意外と自分で悶々と考えないとダメ、って人がいたり、とにかく自分じゃ何にも決められないから誰かが決めてくれないとダメ、って人がいたりする。千差万別ってこういう時に使う言葉なのよね？ 千里は悩み事とか相談事を誰に言うんだろう、仲がいいからって何でも喋る間柄ばかりが美しいわけでもないし。そういえば生理がこないって言うってたのは相談事だったのかな打ち明けた話だったのかな。

とりあえずそれも聞いてみよう、そういえば妊娠本当にしてたかってそこから確かめなきゃね、と思っていたのに、ホームルームの時間になっても千里は来なかった。

あたしの席は窓際の一番端奥なので、廊下側のドア前からでも後ろからでも誰かが入ってくれば見えている。窓の下は一年生の駐輪場で、窓際の教壇前の席あたりに一年校舎の出入り口があるから、そっちを見とけば誰が入ってくるのかも分かる。だけど千里はあたしの視界をちらりとも横切らなかつた。休み？ 千里が学校休んだことなんてあつたっけ？ サボりなら数え切れないほどだけど、千里は一旦は学校に顔を出してからつまんない授業を抜け出したり、

お財布くん達とデートしに行ったりするのにな。あ、もしかして病院行った？ 妊娠検査？

ホームルームに遅れて担任がやってくる。オールドミスっていう古い言葉が良く似合いそうな、結婚してない四十女。スーツはパンツものしか着ないし、ひつつめ髪はお洒落の為に伸ばしてるんじゃない。美容院の存在を思い出さないから気が付いてたら伸びてて仕方ないからくっつてる、って感じ。メガネの縁がまた分厚くて、なんだかなあ。化粧つけないし。その顔があのお美さんを思い出させてまたムカムカする。ちつとも似ていないのに。その担任が出席を取っていく。黒い出席簿、もっとシールとか貼って可愛くすればいいのにな。

「森野さんが休みですが、はい、彼女はしばらく学校を休みます」

クラス分の名前を呼んで、最後に付け足してみたいに担任が言った。あー、千里休みか、しばらく学校を休むのか、って、えええっ？ 妊娠がバレて停学とか、そういうこと？ 展開、早過ぎない？

「事故に遭い、足の骨などを折って入院したそうなので、また退院してきたら授業分のノートなどを見せてあげたりしてください」

事故？ 事故に遭った？ そんなの聞いてない、とか思ったけど、そういえば川本と寝ちゃってからあたし、わたわたしして千里にメールとかしてない。電話とかもしてない。元々、そんなにべったりメールしたりするレズっぽい友達関係じゃないけど。土曜、日曜のたった二日会わない間に、千里どうしちゃったの？

「熊井さん、」

「あつ、はい？」

「後で職員室に来て下さい、ちょっとお話が」

出席を取って、簡単な朝の話をし終わると、担任は教室を出て行く前にあたしの名前を呼んだ。一時間目が始まるまでに十分ある。でも、後で、って他の休み時間って意味？ 分かんなくて変な顔をしていたら、今来なさい、と言われた。職員室に呼ばれるなんて、

なんだろう、千里のことなんだろうけど、プリントとか持って行ってあげなさいとかかな、なんか小学生みたいだ、あはは、なんて軽い気持ちで行ったら。全校朝会するときくらいしか見かけない校長がうちの担任とあたしを出迎えた。えーっ、あたしなんにもしてないよ？

「 やっぱり校長室の方で、」

「 そうですね、他の生徒の出入りもありますし」

って、何しゃべってんの、何の相談なの、校長と担任で話し進めないでよ、ほら、あたし、一時限目の授業があるんですけど！

「 校長室にしましょう」

これでオロオロするのはあたしが小心者だからなのかな、ビビリなんだよう、痛いのも同じくらい怒られるのも嫌いなんですけど、も、もしかして昨日ラブホから出てくるところを誰かに見られててチクられたとか？ え、え、女子高生ってラブホテル禁止されてたっけ、青姦だったらいいの？ って問題でもないだろうけど生徒手帳にそんな規則書いてあったっけ、あたし校則ちゃんと読んだことない。

まだバレてもいない悪事を自分から暴露しちゃいそうになりながら、それこそ学校には関係のない、お姉ちゃんとケンカした日間違えた振りしてお風呂の栓を抜いちゃったのはあたしです、とか担任達の背中について行かされて校長室に入る。職員室の上座と云うか、教頭先生が座る机の斜め後ろにドアがあって、校長室は繋がってる。そこから入って。壁にずらりと表彰状、ガラス張りの棚にトロフィーがいっぱい、黒っぽい皮のソファに観葉植物、校長室の空気ってなんでこんなに止まってる感じがするんだろう。

「 まあ掛けなさい、」

って、髪の毛はゴマシオだけどふさふさな、どっちかっていうと人の良さそうなおじいちゃんっぽい校長がコの字型に並べられているソファをあたしに勧めた。

「 小岩先生も」

担任も促されて、あたしの目の前のソファに沈む。その隣に校長。この図式は、どう見ても怒られる生徒と怒る先生。

「熊井さん、」

きゃー、ラブホ行ったのは本当だし、行こうって言っちゃったのもあたしですけど、冗談にして笑い飛ばすタイミングがなかったからなんです、援交とかじゃないんです、お金もらってないし、自由交際……交際はしてないけど、だって川本は彼氏じゃないし、でもちゃんとゴムもしたから、っていうかつけてくれたはずだから妊娠とかも心配ないはずだし、ごめんなさい親とか呼ばないで下さい、親に迷惑かかるの嫌なんです、だって、だって、お金出してもらって学校とか来てるのにあたし頭悪いまんまでそれだけでも申し訳ないのに、でもそんなのは建前でお父さんはあたしに興味もなさそうだしお母さんは知らない間に昼間お酒飲んだりしてて、もしかしてお母さんのストレスってあたしだったりするのかな、あたしがバカだから、っていろいろいろいろ考えが頭の中でぐるぐるしたけど、担任が口にしたのはあたしの言い訳なんか全然関係のないことだった。

「森野さんと仲良かったわよね？」

「……千里？ 千里とは、はい、」

げー、もしかしてそっちがバレたの？ でもでもあたしは身体とか売ってないし、女子高生と遊びたいって男にクレームとかカラオケとか奢ってもらって遊んであげただけだし、遊ぶっていつても不健全なやつじゃなくて擬似デートっていうか、本当に！ 誓って！ 援交してないし、あーでもお財布が男だったら、しかも知らない男で相手からお小遣いとか貰ってたんだったら援交になっちゃうのかな、だけどそんなに大きな額は貰ってないよ、せいぜい一番高くて一万とかで、うー、千里は分かんないけど、あの娘は寝ちゃったりしてたはずだし、あー、そんなこと言っちゃいけない、今あたしと千里との友情がここで試されているんだわ、口にチャック、嘘ついてでも千里は守る、嘘つく罪悪感ぐらいあたしの胸に秘めて

おくわ、って本当は巻き込まれて自分まで身体使った援交してたんじゃないかって勘ぐられて怒られるのが嫌なだけなのかな、それってあたし、ズルイ……。

「……森野さんがお付き合いしてる男の人は、知ってる？」

「ごめんなさいー、でも本当に知らないんですー、千里はいい子なんですー、って、……はい？」

校長がきよんとした顔に一瞬なつて、でもすぐに真顔に戻った。啓ちゃんさんが、何かしたの？

「あ、ヤク……っと、」

ヤクザさんだったつけかしら、と思つたら口に出てしまつて、慌てて口を噤んだ。え、そっち関係で何かあつたのかな、ただでさえ容量の少ないあたしの頭はパニックしててキャパオーバー！。答えがあるんなら早く教えてくれないと、煙噴いちゃうよあたし。

「ヤク？」

「いいえ、あの、……千里の彼氏がどうかしたんですか？」

千里の彼氏が、あたりで反応して、どうかした、で校長と担任が顔を見合わせた。眉を寄せてお互いにぶつぶつと小声で言い合っている。しかし、だの、でもここは、だの、信用問題に、だの、人命が、だの。

人命？

あーっ、千里の妊娠がバレたとか！ そっち？ そっちなの？

だから啓ちゃんさんの存在が出てきたのね、でもあたし啓ちゃんさん見たことないし名前しか聞いてないし。千里を守るも何も、何にも知らないからしゃべれないよ、これ本当。

「……熊井さん、」

「小岩先生！」

「でも！ もし彼女が何か知っているなら、」

「しかし……！」

「学校の体面もあるでしょうけど、生徒の命に関わることですよ、」
「それはそうですが、……どうしたもののか」

「警察に届けるなら詳しいことを先にこちらが知っておかないと」

「けれど保護者の方は事を荒立てたくないと言っていますし、」

「だけど現に森野さんが！」

あたしのこと、放つたらかしくなってるよ、先生達。

警察とか命とかがつてなによ、ヤバイことなの？ ヤバイことなのね？ 子供が聞いてちやいけな話ならそつと校長室出てくわよ、つていうかコーヒーとか出さないものなのしらね、生徒相手じゃ出さないか、なんてあたしだけプチのほほんと校長室のソファに沈んだ。皮の感触がお尻にひんやり冷たい。つるつるで、張りがあつて、手の平で撫でてると気持ちいい。

なんて、思ってる場合じゃなかったんだけど。

北部総合病院は北部小学校と北部中学校の間にある細道を入つて行つて、突如現れる私鉄の細い線路を渡つたところにある。近くにスーパーとか居酒屋さんとか大きな本屋さんとかがあつて、確かに小中学校の校門は裏の国道に面した方にあるけど、買い食いとかし放題だろうし本屋さんで万引きとかする子もいるだろうし酔っ払いに絡まれたりしないのかな、どうなんだろう、つて環境だけど、どちらも出身校ではないから詳しいことは分かんない。

病院方向まで軽く上り坂になつていいるから、自転車のギアを軽くした。自転車乗るのは好きだけど、長距離はちよつとご勘弁だ。ひよわっ子だから体力がないのよ、体育の時間とかだつていかにサボるかを考えてるし。

『三〇二号室、個室だそうだから、』

北部地区に縁があるここ最近だな、と思ひながら、あたしは担任から言われた病室を思い出す。

千里の入院している病院。の近くについてこの前の土曜日にあたしがショックを受けた北部体育館があつて、この地区つてあたしにとつてあんまりいい場所じゃなかったんだったりして、なんて苦笑が

漏れる。ああタカちゃん。

なんで急にこんなにタカちゃんが好きになっちゃったのかな、タカちゃん、千里が大変だよ、あー、今すぐタカちゃんのアパートに飛んでって友達が大変！ って叫びたい、タカちゃん聞いてくれるかな、また、はあ？ って顔するだけだったりして、でも人命に関わることだし！ あたし、うっかり友達失くすところだったし！

千里の事故。

事故ってなってるだけで、実際は二階の高さのところから落ちたらしい。もつと正確に言くと、落とされた。誰に。千里の彼氏に。

本人の口から聞いた話じゃないから本当かどうか分かんないんだけど、どうも啓ちゃんさんの住むアパートの外階段のところから千里が突き飛ばされて背中から落ちて行って、下の石垣に脚をぶつけて大腿骨骨折、腰を強打、頭も打ったようなので救急車を呼ばれて大騒ぎになったらしいんだけど、意識はしっかりしてて、自分から誤って転落した、って言った、そう。でも道路でサッカーボール蹴って遊んでた小学生の男の子ふたり その子達がびっくりして騒いだもんで、近所から人が出てきて倒れてる千里を発見、救急車を呼んでくれたんだって が、男の人が突き落とされたよ、って言って、でも千里は違うって言い張って。

『本人が自分で落ちたって言い張るから、とりあえず警察には届けていないそうだけど、落ちた所がどうも森野さんがお付き合ひしている男性が住んでいるアパートだったそう、』

先生達も混乱してたんだろう、普通生徒にそんなこと話しちゃっていいのかな、って思ったけど、どうやら担任や校長は、あたしから千里は本当に自分で落ちたのか誰かから落とされたのかを聞いて欲しかったらしい。友達だったら本当のことを話すだろうからってでもさ、もし本当のことを話してくれたとして、あたしがそれを担任達にしゃべっちゃったら、それって裏切り行為じゃないの？ あたし、千里との友情壊されちゃうことになるんですけど。

それより、そのへビーな恋愛関係は何よ、あたしの処女喪失、タ

力ちゃん好きな人がいた事件なんてちゃんちゃら甘ちゃんでお子様お悩み相談室レベルの問題じゃないの、恋愛って、恋愛ってそんなに命がけ？

でも意識がはっきりしてるんだっいたら大丈夫なのかな、脚折るとどれぐらいで治るんだろう、お見舞いの時って何が欲しいって言うっけ、お母さんー。

途中で自転車を停めて電話してみる。携帯電話って便利だなあ。

「もしもし？ あたし、あたしだけだよ、」

『あら咲、オレオレ詐欺なら聞くけど、あたしあたし詐欺はお母さんをはじめて聞いたわ』

国道脇の歩道にいるから、トラックなんかが通ると排気ガスにやられちゃう。右側にかかるく自転車倒して、片足だけちゃんとして立ってるんだけど、バランス悪いのか転びそう。

『あ、帰りに牛乳買ってきてくれないかしら』

お母さん、何故あなたが電話したあたしに用事を言いつける？

「……いいけど、後でお金くれる？」

『あげるわよ、ちゃんと。ローファットのはダメよ、知弘が嫌いだから』

「ローファット？」

『低脂肪乳、安いんだけどね。あ、あと半値とか割引になってるの買ってきちゃダメよ、なるべく消費期限の長いやつにするのよ』

スーパーで買うのよ、コンビニはやめてね、日付はちゃんと確認してね、といるいる注文をつけてくるから、うるさいなーって電話を切ろうとして思い出す。

「違うよお母さん！」

『なにが？ あ、今日の晩ご飯なんだと思う？ うふふー、咲の好きなものよ』

「え、え、え、オムライス？ ……違う、お母さん、あたしが用事あるの！ だから電話したの！」

『あらそうだったっけ』

お母さん友達とか少ないのかな、日中家にばっかいて誰ともしやべったりしないんじゃないのかな、なんかあたしと話すのも嬉しそうで、だけどそれって娘と親しい、とかっていうよりはやっとしやべれる人が見つかったわ、って感じなんだもん。

「あのさ、友達が入院しちゃったんだけど。お見舞いってなに持ってけばいいの？」

「えーっ、誰が入院しちゃったの！」

「……だからあたしの友達。ね、お見舞いってなに持ってけばいいもん？」

そういえば横浜のおばちゃんが入院した時はあの人、腎臓悪くしたくせに塩辛とか佃煮食べたいつて騒いでね、って、また話が脱線するし。お母さん！

「そうねえ、内科の入院だったら食べ物はやめといた方がいいと思うけど。お花とかがやっぱり無難じゃないかしら。外科関係だったら本人に聞いて、食べるもの持って行ってあげてもいいと思うわよ。あと、暇だろうから雑誌なんか持って行ってあげればいいんじゃないかしらね」

「外科とか内科とかの区別がつかない」

「まあ……！ お友達、何で入院したって？」

落とされた事件から話さなきゃなんないのかと一瞬悩んで、そこまで言わなくてもいいか、と判断する。

「骨折」

パパパパパー、とクラクシヨンが鳴らされて、驚いたら青信号なのに停まつてる車があったからだ。うるさいな、もう。ちよつとくらいゆとり持とうよ、狭い日本そんな急いでどこへ行く。

「骨折なら外科でしょう、食べ物でもいいんじゃない？」

千里の好きな食べ物ってなんだろう。プリン？ あー、プリン、シュークリームとか。食べ物は次にお見舞いに来るときにしようかな、何が食べたいか聞いて。花？ 花って意外と高いんだよね、そこらの雑草摘んでく訳にいかないし。よし、雑誌にしよう、雑誌雑

誌、コンビニ寄って行くコンビニ。あ、でもあたし化粧の方法千里に教えてもらおうと思ってたから、適当なやつ一冊、お姉ちゃんの部屋から失敬して持ってるな、今日。それ置いてこようかな、暇つぶしにどうぞ、って。お金使わなくて済むし、そうしようかな、そうしようって。

「ありがとうお母さん、千里のお見舞い行ってくるね」

『あら千里ちゃんって、あの咲が』

何か話しかけてたけど切っちゃった、携帯。

あ、今日の晩御飯聞きそびれた、オムライスだったのかな、本当に。でもうちはお父さんが子供味のものが好きじゃなくて、だからお母さんは焼いた魚とか煮物とか、とろろ汁とかそんなのばかりを食卓に上げる。もしも子供味のもの オムライスとかハンバーグとか、シチューとかスパゲッティとか だとしたら、お父さんがご飯要らない日なのかもしれない。お父さん、大抵家でご飯食べるけど。あー、お父さんはあの写メの人ともご飯食べたりのかな、一回だけの浮気なのか続いている浮気なのか、それにもよるだろうけど。だけどバカじゃん、浮気相手のあそこを記録で残しとくなんて、変にはしゃいでる大人って感じて見苦しい。非処女になったあたしも、ああいう大人の一人なのかな、お父さんの子供だし、血は流れてて傾向はあるかも、嫌だけど。

一文字の自転車ハンドルを握りなおして、さて病院に、と思ったら携帯が鳴った。着メロ。着うたは苦手なんだよね、っていうか携帯の呼び出しって気付かなくて、しばらくぼやーんって聴いちやっつてたりするし。

携帯のいわゆる外窓って呼ばれるディスプレイに表示された名前を何気なく見て、う、って止まる。動作が。かわもと、の文字。あー、あたし登録で漢字変換しなかったんだっけ。

「……えー、なんで電話とかくるのよー」

そういうのって夜とかじゃないの？ あたしはきよるきよる周りを見回して、別に誰がいようと関係ないんだけどそのまま鳴り続け

ている携帯を制服のポケットに突っ込んだ。バイブ機能もつけてあるから、ぶるぶるぶるって布が震える、その感触が肌に遠くの方から伝わってくる。

あたし忙しいの、と言いつきはもちろん本人に届かないまま、自転車をえいやつと漕ぎ出した。携帯はしばらく鳴っていたけど、一旦切れたらそれきりかかってはこなくなつた。

昔、炭酸飲料が飲めなかつた。

身体に悪いからって、お母さんが子供達に飲ませなかつたつてもあるけど、あのしゅわしゅわした感じとごくごく飲めないところが嫌いで。一息ついた頃に、鼻へと大きく抜けるゲップが出るし。あれで、むせるし。

だけど今は飲める、コーラもサイダーも平気で、どっちかかっていうと大好きで。いつから飲めるようになったのかは覚えてない、気が付いたら飲めてて、好きになつて。大人になるのも通過点があるわけじゃなくて、いつか振り返ったときに、あの頃だったのかな、って思う程度のものなのかもしれない。もっと境界線がはっきりしてればいいのに。二十歳、なんていう、全員平等の意味がない境目なんかじゃなくて、人それぞれの。

タカちゃんに会いたくて、雨が降るのを望んでたけど降らなかつた。病院帰りにアパートの方を周って、その時はもう七時になりそうだったけど部屋の電気は点いてなかつた。

『……笑いに來たんでしょ』

千里の冷たい声、あんなトーンでしゃべるのをあたしは今まで聞いたことがない。

病院の個室はクリームホワイトの壁で、大きな窓からは光がたくさん入ってくるようになっていて結構暑く、ベッドを覆うためのカーテンは薄い緑色でベッドには薄いピンク色の毛布がかかつてた。脚を上げて固定された状態の千里は髪をみつあみにして左右に流し

てあって、マスカラもしてないし眉も描かれてないしでいつもよりずっと幼く見えた。

千里、って声掛けて。

笑っていいのか真面目な顔していいのか分かんなかったけど、暗い顔してたら心配掛けるわな、って微笑んで見せて。大丈夫？　って、自転車の鍵を右手に握ったまま聞いてみたら。

笑いに来たんでしよう、って。

冷たい、自嘲した声が。

あたしの耳に入ってきて、笑うわけないじゃん、って慌てて言ったんだけど、そしたら千里はすごく厳しい目付きであたしを睨んだ。『笑えばいいでしょ、そうよ妊娠したって啓ちゃんに言ったらこんなこんな様よ、笑いなさいよ、突き落とされたのよ、そうよ、誰から聞いたの、なんでここに来たのよ！』

背中が凍りそうなくらいの睨みが、あたしを動けなくさせる。

『私を笑いに来たんでしよう、笑えばいいじゃない、バカだって、そうよ私はバカよ、啓ちゃんは私のこと本当に好きじゃなかったんだ、だからあんなに簡単に私を、ゴミでも落とすように、ポイって私のこと階段から押して……』

頭に巻かれた包帯の白さ。よく見れば腕にも包帯は巻いてあって、右頬には大きな擦り傷が赤く見える。真っ白い顔、興奮するとどこかが痛むのか、千里は時折顔を顰めた。

『笑いなさいよ、バカだって、啓ちゃんは私のこと好きじゃなかった、だから他の男との援交なんかを斡旋してくれてたんだって、私だけが分かってなかったんだって、笑えばいいでしょ！　……誰の子なんだって、啓ちゃん言った……』

個室の入り口で固まってるあたしを無視して千里は怒鳴っていたけど、ピークまで達したら徐々に弱くなっていった。

『……誰の子なんだ、って、何よ……啓ちゃんの子だよ、って、私言ったのに、冗談だと思ったから明るく言って、そういう冗談は傷付くよって続けようとしたのに、その前に啓ちゃん……』

すつごくうざそうな顔して、って。

切なそうな声が震えてた。感情剥き出しの千里を、あたしは知らない。見たことのない女の子がそこにいるみたいだった。怖い、と思った。失礼なことだろうけど。

『子供もお前もいらんわ、って、私を階段から突き落とされたのよ、そうよ、私、啓ちゃんに少しも大事にしてもらってなかった……』
帰って、と咳かれる。最初よく聞こえなくて、聞き返したら怒ったような涙声で、帰って、とはつきり告げられる。

千里、って声掛けたけど。

『ごめん、悪いけど帰って』

うん、って。頷く以外に何ができたっていうんだらう。

あたし、もつと軽く考えてて、顔見て、やだーやっちゃったよあはははは、なんて話せるんだって思ってた。ケーキ貰ったけど食べるー？　なんて。啓ちゃん冗談が過ぎるんだよねー、ふざけてたら二階から落ちちゃったよ、死ななくて良かった、マジで！　とかつて、そんな話をして、ふたりで笑うんだと思ってたのに。

千里、本当に妊娠してたんだ。

啓ちゃんさんに言ったんだ。

でも啓ちゃんさんは千里のこと要らなかったんだ。それって。

それって。

タカちゃん、って強く思った、ねえ、その車に轢かれても大丈夫だった無敵さを千里とあたしに分けてよ。あたしにはくれなくてもいいから、千里に分けてあげてよ。

ごめんね、って言って病室を出た、千里の怒鳴り声で見回りにきたらしい看護師さんがどうしましたかって聞いてきたけど、なんでもないんですって首振るしかできなかった。ピンクの白衣に白いカーディガン。病院の消毒の匂い。つるつるの床にはカラーテープで道案内が施してあって。それを眺めながら正面玄関、っていう緑のテープに沿って歩く。

タカちゃん。

あたしの相談事は確かにちっちゃいことで、そんなことで精一杯になつてゐるのつて千里から見れば怒りたくなるくらいだろうけど、恋愛とかちつとも命がかつてないしお子様な悩みだつたりするだろうけど、あたしもいっぱいばいばいで。知らなかつた部分の千里を見てオロオロして、助けてつて誰に言つていいのか分かんなくて。助けて。

悩みを口に出すと考えがなんとなくまとまつてくるタイプの人間に、話を聞いてくれる人を与えないでおくと悩みはますます深くなつて混乱してくるんですけど。よく考えたらあたし、千里以外に仲良い友達つていないっばいな、クラスメイトとは仲悪くないしいじめられてだつていないけど、表面上でしか付き合つてない感じで。

あたし、結構友達いない人？

友達と知り合いと、ただのクラスメイトの違いを誰か教えてください。
さ。

千里。

千里はあたしの友達？ クラスメイト？ 知り合い？ 仲間？
仲間つてなんだろう、仲間つて言葉は一緒に汗流したりする間柄じゃないと使つちやいけない気がする、実際に流すんでも精神的に流すんでも。仲間つて、この前の見せてもらったバレーの人達みたいな。タカちゃん。タカちゃん、由美さんが好きなんだな、由美さんの返事待ちなのかな、晩生つて言つてたからまだなにも告げてないかもしれない、告白順に恋人の席が決まつてしまうものなら良かったのに、どうしてあれだけは後出しも横入りも順番抜かしも許されてしまうの？ つて、あたしの方が後から出てきたのか、後出しも許されるのに勝てないのは痛い。

「タカちゃん……」

あたしの頭、許容量少ないから、もういっぱいばいばいで。

千里に怒鳴られたのが、病院の玄関に向かう一歩ごとにリアルさを帯びてくる。

笑つてないよ。

って。

どうしてあの場で言えなかったんだろう。

笑ってなかったけど、笑うつもりもなかったけど、千里の状態を軽く考えてたから。タカちゃんと話す口実に使おうとしてたから。

「後ろめたさだ……」

ここで逃げちゃ、ダメなんじゃないかしら。あたしはビビリの弱虫だけ。

ここで逃げちゃうのは、卑怯、っていうより、ここで逃げたらあたし、千里ともう二度と口利けなくなっちゃう。よね？

くるりと回れ左をして、あたしは顔を上げる。心が暗くなつてくると、ついつい下を向いちゃうから。あたしはお見舞いに来たの。千里の。あたしは友達なの。担任に言われたからとか、誰かにその状態を話したいとか、そんなんじゃないかって心配をまず先にするべきだったの、話を聞いてあげなきゃ、よし、よしよし、よしよしよし、咲、行くよ！

なんて思っても、一度怒鳴られた記憶が残っちゃうと、でもやっぱり明日とかにしようかな、なんて思っちゃうのでいけない。行くよ、咲！

「……よっしゃ！」

傍から見ればあたし、今大バカひとり芝居女子高生だろうな。でも、そんなの気にしていると戻れなくなっちゃう。千里の病室に。

まだどこか明日に回しちゃいたい気分の残りを振り切るように、あたしは元来た道を走り出す。歩いてたら気持ち萎えちゃうから。緑のビニールテープを沿って走る。

「病院内を走らないで下さい！」

あー、看護師さんごめんね。

灰色の床を蹴って、鞆の中身をガチャガチャいわせて、エレベーターに乗るんだっただけいいやつて思ってた階段を選択する。走る走る、熊井咲。コグマちゃんのお通りだよ、二段抜かしなんてまどろっこしいけど、三段抜かしは足の長さがちょっと足りなかった。

三階について一息入れたかったけど調子が出てきちゃってたからばくばくいつてる心臓は無視することにする。すっぱいものがこみ上げてくるけど、それも無視。ナースステーションの中からまた、病院内を走っちゃダメよ！　って言われたけど、ごめんなさい！　って言い返して、車椅子の人の脇とか、松葉杖の人の前とかを走り抜けたり横切ったりしてそのままの勢いで三〇二号室のスライド式になっているドアを開けた。

「ち、ちさつ、千里っ、ご、ごめ！」

ドア、勢い良すぎてバーンってぶつかるし。

千里がものつすぐく驚いた顔であたしを見た。

「ちよ、ちよっと、待って」

息切れてる、あたし。ぜいぜい荒い息してると、胸のところ差し込むように痛い。胃液が毛穴から漏れそうにすっぱい感じもする。待ってね、のジエスチャーで、右手の平を千里に向けて。突然のことで千里の目がまん丸になって、結構可愛い。それにしてもあたし、体力ないな。基礎体力がないんだな、もうちよっと体育とか真面目に受けた方がいいかもしない。

「ふはあつ、苦しいー、ダツシュ辛しいー！」

「……どっから走ってきたのよ、咲が走るとこなんて初めて見たかも」

「えー、そんなことないじゃん、信号変わっちゃいそうなときとかちゃんと走ってるじゃん」

「嘘だよー、咲、走らないよ、どうせ歩行者が優先だもんねー、って言ったらたら歩いてるじゃん」

「え、え、え、嘘だ、嘘だよー、あたしだって走るときは走ってるよ、そりゃ数えるほどしかなかったとしても」

顔が火照ってて頭から湯気が出そう。きつと茹でダコみたいな真っ赤さだ、あたし。まだ肩が上下する。吐いた後に似た胸の痛みが気持ち悪い。鼻まで痒くなってきちゃって、人差し指を横にしてごしごしごしごしってこすったら、赤っ鼻！　と千里が思わずって風

に吹き出した。人のこと指差し。むむむ、千里さん、失礼じゃないかしら？

「もう、全力で走っちゃったんだからー！
ゴメンね、でも本当にあたし、笑ってないよ」
ゴメンね、千里

下半身が固定されているから、千里は上半身だけをねじって笑っていたけれど、あたしの言葉に笑うのをぴたりと止める。

「千里、」
ぎゅっ、と唇結んで、怖い顔してこっちを見て。千里の視線が、あたしに突き刺さる。あ、言葉を間違えたのかな、タイミングを間違えたのかな、って焦ったけど、結ばれた唇が細かく震えているのに気付いたら、待っていたかのように千里の表情が崩れた。ぐしゃあ、って。

「千里、」
「咲い、」

こぼれたのは、大きな粒の涙。
白い頬に、ころがるようにぼろぼろと。

「わ、私こそ、や、やつ、八つ当たり、だっ、だったの、ごっ、ごめんね、さ、咲い、」
「うっん、うっん、でもあたしも考えなしだったの、本当に、もっと早くに一緒に悩んであげなくてごめんね、ごめんね、千里のこと、ちゃんと真剣に考えてなかったの、親身になってあげられなかったの、ごめんね、ごめんねー」

今度は千里が鼻を赤くして泣き出したけど、あたしは指を差して笑ったりはしなかった。つられて胸にじーんとした痛みが広がって、一緒に泣きそうになった。目頭、熱くなっちゃったもん。

ベッドに近付いて、千里の手を取る。冷たい手。ぎゅっ握って、泣きやむまでそのままだった。あたしだったら、こういう時は泣くだけ泣きたいから。声掛けられたら、返事を考えればいい。

あつたかい病室の中はさっきと同じようにオレンジ色っぽく幸せそうに見えて、こんな状態だからこそ環境が暖かで清潔で静かに整

ってないとみんな死にたくなっちゃうんだろうな、なんて思った。

「バチが当たったんだよ」

鼻をすすりながら、ぼつりと千里が呟く。

「何言ってる、」

「ううん、だって本当だもん、私、バチが当たったんだと思う。男の人のこと、お財布なんて呼んで、平気で寝たりしてお金貰って。

……っていうのが建前で、本当はショックで頭おかしくなりそう、啓ちゃんが、啓ちゃんが私のこと突き落としたこと。でもどっかで最初から分かった気もする、信じたくなかったの、啓ちゃんが私のことただの便利な女、くらいに思ってた、彼女としてなんか認められてなかったんだろうなーって」

だって本気で惚れてる女が別の男と寝てたりしたら許せないでしょ？ それを、男韓旋するくらいなんだもん、いい金蔓は私の方だよね、って。

「……金蔓？」

「私、啓ちゃんにお金渡してた。少なくて半分、多いときは全部」

「それって、啓ちゃんさんが韓旋してくれた相手と、その、遊びに行っただけの？」

うん、と千里が頷く。鼻の頭と、目の縁が赤く染まっている。

「お金渡すときと、エッチするときだけ、啓ちゃん優しくなるんだもん……」

「千里ー、」

それはあたし達がするような恋愛じゃないじゃん、ダメじゃん、楽しくないじゃん、幸せじゃないじゃん。片想いよりひどい、すぐに別れちゃったりするのよりひどい、哀しい恋愛なんかすると魂が磨り減っちゃう感じがするの、あたしの状態でさえそうなのに、千里、そんな恋愛したら魂削れてなくなっちゃうよ。

「……千里、どうするの、」

「もともと啓ちゃんは私のこと彼女だと思ってないって」

「でもまだ、」

「うーん、どうなんだろう、打ち所悪かったら死んじゃってたんだとさうなー、とは思っけど、シヨックは確かに大きくて、でもなんか上手く信じれてないっていうか、まだね。うん。なんか理由があったんじゃないのかな、って、思いたいっていうのが、……あーあ、私もバカだー」

学校、大騒ぎ？ と聞かれたから、ううん、と首を振って見せる。担任は事故、としか告げてないから、みんな交通事故だと思ってるだろうし。お見舞いどうしましうか、なんて、級長がホームルームのときに発言してたけど、まだ落ち着いてからの方がいいでしょう、なんて担任に言われてたし。ものすごく心配してどうしようどうしようってなってるクラスメイトはいなかった、あたし達、あんまり連帯感とかないし、仲間意識も薄いみたいだし、べたべた暑苦しくないけどさらっとしすぎて薄情に思えるときもある、でもあたしだって千里じゃない娘が入院してても、ふうん、くらいにしか思わなかっただろう。

「……ひとりしていると、ずっと頭ぐるぐるしてたの。啓ちゃんに突き落とされる夢とか、何度も見るし」

「……ごめんね」

「なんで咲が謝るのよー。あはは、呑気そつな顔してるくせに」
「のっ！」

呑気そつとは失礼な。

「昼間はいいんだよ、でも夜がダメ。すごく怖い、病室に啓ちゃんがかかるんじゃないかな、とか、それがお見舞いとかって意味じゃなくて、包丁とか持ってくるんじゃないかって怖くて。寝るのも怖いし。でも暗い中でじっとしてるのも怖いし」

「……雑誌、置いてく」

「夜は読めないよー」

「いつでもいいじゃん、ごめんね、なんかお見舞いに持ってきて欲しいものある？」

あたしが聞くと、千里はおさげを指先でいじりながらしばらく黙

つてて、やっと口を開いたと思ったたら小さな小さな声で、啓ちゃん、と言った。

啓ちゃん、つて。

自分を要らないからつて、アパートの階段からぽいつて捨てちゃえる男なのに。そんなのが、お見舞いで欲しいものなんて。でもきつと、あたしがもし千里の立場だったら、同じことを言ってるかもしれない。突き落としたとか殺そうとしたとかが本当でも、きつといろんな言い訳を並べ立てて、好きな人を弁護しようとすると思う。バカだつて言われても。なんか理由があつたんだよ、とか、きつとパニックになつちやつたんだよ、とか。自分で嘘だつて思っつていても。

「千里……」

「エツチしてるときとか、お金あげたときの、優しい啓ちゃんが欲しい」

そんなときだけ優しいのなんて、本当は悪い奴だよ。絶対。

お腹の子は、つて恐る恐る聞いたたら、千里はちらりとあたしを上目遣いで見て、ブイサインを出した。えつと、それは。

「誰に似たんだけ、無茶苦茶丈夫みたい」

「……無事、だったの？」

「うん」

わあ。それは、不幸中の幸いだったのか、一難去つてまた一難なのか。

だけど生きてる命だし。それが不幸か幸福かは、千里とその子が決めればいいことで、外野は口出しできないし。

「……良かった、ね？」

疑問形になつてしまったあたしの言葉に、千里が微笑んで頷いた。繋いでいた手が汗ばんで、熱がお互いに均等になつていく気がする。じゃあ今、手を繋いでるのはあたしと千里だけど、本当はもうひとり分の体温がここにあるのかな。

「おばあちゃん達に怒られるかなー」

「まだ言っていないの？ あ、学校どうするの？」

「うーん、またおいおい考える」

「……産む？」

「……多分」

多分、つてその言葉が、千里の本当の気持ちなんだろうな。あたし達はまだ庇護される年齢で、ひとりでは歩いていけなくて、甘える気がないわけじゃなくて、周りの大人の意見を聞くのが結局は一番楽なんだつて知ってるから。

あたしは結局タカちゃんのことも非処女になった話もできないまま、だけど千里となんかいろいろしゃべってた。面会時間が過ぎても看護師さん達は放っといってくれたけど、さすがに晩ご飯の時間になったら追い出されてしまつて。だけど病院の晩ご飯つて早過ぎる、夜中お腹空いてたまんないんじゃないの？

また来るね、つて言つたら、千里が嬉しそうにしてくれたから、さっきケンカしたままにしておかなくて良かった、つて、帰り際になつてから思つて、あたしは今更泣きそうになつてた。

路地裏のクマ・7 (前書き)

続きます。

髪の毛を伸ばそうと、思うんだけど。

『咲ちゃんは短いのが可愛いと思うけどな、オレ、ショートの子って好きだし』

「別に遼さんの意見なんか聞いてないもん」

遼さん、つて、川本。

なんかこの頃、電話友達になってるっぽい。結構この人ママで、二日に一回は電話かけてくるし、メアド教えたら一日二十通はきてる。でも電話するよりメールのやりとりの方が楽、嫌だったら無視しとけるし、電話だとも鳴ったら出ないといけない気がしてどんな相手からのもつい出ちゃうから。

でもメールも結構ちゃんと返してるな、あたし。

「髪伸ばしたいもん、大人ー！　つて感じになれそうだし」

『時間が経てば自然と大人になるんだから、今わざわざ大人っぽくする必要ないじゃんか』

「…………一般論つまんない」

『髪伸ばしただけで大人になるって考えてるお子様よりはマシですー、でもマジで、咲ちゃんはあんまり長くない方が似合うよ、絶対』
「あたしが髪伸ばしたところ見たことないのに、適当言っつな！」

でさ、今度の日曜とかがつて、と切り出されるから、あたしはごめんねって思いながら千里の名前を出す。友達入院してて、一番の友達だし、日曜は一日中お見舞いなの、つて。でももうこれで断られるの三度目なんだから、気付いてよ、誘わないでって暗に言われていることに。はつきり言わないとダメなのかな、言外に察して、なんて。言外に察する、なんて頭良さそうない方、最近の原告の授業で習ったもんだからあたしは使いたくて仕方がない。行間に漂わせ

る、つてのも習ったけど、しゃべってるときは行間なんてないしな。『咲ちゃんは友達想いだよなー』

「ちがうよ、そんなんじゃないけどさ、」
つて、否定しそうになっちゃった、危ない危ない、たまにはお見舞い早く切り上げてじゃあボクと、なんて言われたらたまったもんじゃない。

川本はあたしの初体験の相手でもあるし、悪い奴じゃないって思うけど、でもふたりきりで出かけるとか恋人になってみるとか、そんなんじゃない。タカちゃんが好きだし、あたし。

この前、天気が悪かったからチャンスだと思ってタカちゃん家に行ったら、思ってた通り部屋の電気が点いてた。タカちゃん、ってドア叩いて、中に入れてもらって。なんか久しぶりだねー、って言ったのにタカちゃんは、そうか？ つて首傾げただけだった。バレーの見学以来なのに、タカちゃんあたしに相変わらず興味なさ過ぎ。

久しぶりのタカちゃんの部屋はだけど前と何も変わってなくて、タカちゃんのお兄ちゃんが非常用に備蓄してあるカップ麺が減ってたのと、バレーの雑誌が増えてたことくらいしか取り敢えずの変化は見えなかった。

タカちゃんはあたしに、何しに来た、つて聞かない。あたしはただそこにいるだけで、でもいてもいいって暗黙のうちに認められるんだっていい方に捉えると嬉しくなる。邪魔にならないっていうのは、長く続く秘訣よね。お母さんが前に言ってた、結婚生活も長くなるとお互い邪魔にならない、干渉し過ぎない、そこに存在を一応認めておくつてというのが大事なのよ、つて。一応、つてのがちょっと引かかるけど。

タカちゃんはまたテレビを見てて、あたしはすることもなくて携帯をいじってた。いつもはそれで、あたしが声かけるまで会話なしなんだけど。珍しく、タカちゃんが声をかけてきた。思い出したみたいに。おい、つて。

おいコグマ、って。

なに、ってあたし俊速でタカちゃんの方見て、やだ話しかけてきた！ って大喜びだったんだけど。

川本はああ見えていい奴だからさ、なんて、続いて。

ガクーン。

なにそれ。

川本がお前に興味あるみたいだぞ、とか、この前わざわざふたりつきりにしてやったけどどっか行ったか、とかって聞かないでよ、ホテル行って祝初体験しちゃいました、なんて言えないでしょうが言ってもタカちゃん、驚きもしないんだらうけど。哀しみもしないんだらうけど。怒ったりもしないんだらうな、あーあ、あたしが切なくなっちゃう。

それに、あたし達ふたりつきりにしたとか言って、本当はタカちゃんか由美さんとふたりになりたかったんじゃない、絶対そうなんじゃない。

タカちゃんとしやべってると哀しくなることが多い、好きなのに好きだから、些細なことで傷ついたり心が痛んだり、あたしのハートは押し傷だらけのバナナみたいよ、真っ黒よ？

『 でき、タカが間違つて、』

「えっ、タカちゃんが何？」

川本との電話に引き戻されて、いつの間にかタカちゃんの家に行つてたことを思い出してぼんやりしていた自分に気付く。タカ、の単語で反応してるし。

『 あ、呆けてたな、聞いてなかったんだらうー』

「違うよ、今、ほら、お母さんから、呼ばれちゃって、ちょっと、」

『 あ、そうなの？ なんだって、用事聞いてこなくていの？』

「あー、あー、あー、うん、あの、お風呂空いたよって、うん、そんな感じの、」

どんな感じだよ、あたしの嘘ってボロボロだな。でも川本は騙されてくれて、そっか風呂か、なんて言う。あたしはさっきの、タカ

が間違つて、の続きが気になるんですけど、もう聞けないのかしら、それ。

『入っといで、風呂』

「あー、うん、そうする」

嘘なんだけど。

川本、意外といい奴で、めげないし、あたしのこと可愛いとか言うし、なんでこいつじゃダメなんだろう。こいつにしとけば、あたしもハッピーライフが送れるだろうに、ちやほやしてもらって行きたいとか欲しいものとか、そりゃ全部願いが叶えられる訳じゃないだろうけど、我儘だつて言えるだろうし。

やっぱりすぐに手に入るものはありがたみがないのかな。そんな、失礼なことを思ってしまう。

それにしてもタカちゃんのフルネーム知らないのに、川本の名前は知っちゃつたのつて、あたしは誰が好きなのよ、つて話だ。携番もメアドも、タカちゃんのは知らない。

「そりゃダメだよー、いくらいい人でもさ、ときめかないと意味ないしー！」

つて、だから川本のことを話してみた千里にもそう言われる。

あたしはここんところずっと千里とべったりで、ほとんど毎日病院にいる。

「それに咲は違う人好きなんだもん、妥協して付き合っても絶対どつかで苦しくなるつて！」

恋愛の話になるとどうして女子つて生き物は生き生きしてくるんだらう。

あと一週間でギブスを外せるかもしれない千里は、このところ元気だ。早く自分でトイレに行きたいつて言ってる。今は、誰かに支えてもらつてやつと、でもその前は尿道にチューブを入れて出してたつていうから、乙女がなんてことを！ つて恥ずかしいのと聞いてて痛くなつてきちゃうのとであたしが赤面してた。

「でもさー、あたしがタカちゃん好きなように、タカちゃんは由美

さん好きなんじゃん、しかも由美さんもまんざらじゃないとしたらさ、あたし不利じゃん」

「そんなの、相手おばさんなんでしょ？ おばさんなんか敵じゃないよ、タカさんだって絶対結局は若い女のがいいって思うって！」

「でもさ、でもさ、若い女がいいって気付いたときにあたしがおばさんになってたらどうすんのよー」

「でもー、とか、だけどー、とか言わないの！ 否定的だとダメだよー、物事も悪い方にしか進まなくなっちゃうもん」

千里はタカちゃんにも由美さんにも会ったことがないから、あたしが話すふたりそのまんまのイメージで受け取ってるんだろうけど、現実以上にあたしは由美さんのこと悪い印象で伝えちゃってるかもしない。千里の頭の中で、由美さんはどれくらいぶさいくなおばさんになってるんだろう。

「別に、川本と付き合おうとか思っていないよ、代わりにするとか嫌だし、でもタカちゃんのことはこのまま諦めちゃおうかなーって、」
「嘘つき、諦めようなんて思ってもないくせに」

目を細めて意地悪そうな顔を作って笑う千里に、あたしはうつと詰まって降参ポーズを取るしかない。

「諦めちゃダメだよ、とかって他人に言ってもらおうなんて考えるのは甘いよ、本当に嫌だったら自分でさっさと諦めるべきだもんね」

「うー、千里が厳しい……」

「咲は他人に左右される恋愛なんかして楽しいって思うの？」

「……思わない、」

でも、他人の存在であたしの恋愛は左右されちゃうじゃん、タカちゃんの気持ちは他人の方を向いてるじゃん。

あー、なんで好きって気持ちだけで終わらないの？ あの人好きだ、そっかあたしはあの人好きなんだ、うふふ好き好きー、で終わっちゃうわないの、どうして相手の気持ちもこっち向いてくんなきや嫌って思っちゃうの？

「恋に落ちるには理由が要らないけど、恋を手放すのには理由が要

るんだよ、咲は理由を手に入れてないじゃん！」

千里は恋愛カウンセラーとかになれそうだよ、って、ちょっとあたしは遠い目をしちゃうけど。

「……由美さんの存在とか、タカちゃんが振り向いてくれないっていう理由が、」

「そんなの理由じゃない！ そんなのは、自分が傷付きたくないからって逃げてるだけ！」

「か、勝ち目のない勝負なんて最初から分かっていたらさー、」

「それでもタカさん好きなんですよ？ 逃げてどうすんのよ！」

病院生活は暇なんだな。外科病棟は結構人の入れ替わりが早いらしいし、似たような年の子はいないなさそうだし、刺激も少ないだろうし。だから、千里の言葉はあたしのためってより、面白がつてる節の方が大きい気がする。

「逃げてなんか、」

「逃げてるって、だって咲はまだぶつかってないじゃん、タカさんに！」

「ぶつかる……」

そういえばあたし、タカちゃんに何か具体的に「あたしを見て！」的なことって何かしたっけ……。いつもタカちゃん家で、カップラーメン食べていいかって騒いでたり、ピザとかお寿司とかを配達してもらって食べてたり、テレビ見てるタカちゃんの後ろからあたしも画面見てたり、携帯いじってたり、タカちゃんが寝てるからあたしも隅っこでごろごろしてみたり、雑誌めくってみたり、お風呂掃除してあげるって勝手に部屋の中探索してみたり、窓の外眺めたり。……あたし、あんまりタカちゃんの前で意味のあることをしてないっていうか、自分ひとりでタカちゃんの一挙手一投足に一喜一憂したりしてるだけ？

好きとか言って拒絶されたら、とかの前に、あたし、何もしてないんじゃない？

「わーお、千里」

「わーお、咲。何よ？」

「あたし、バレエでも始めようかな？」

「はー？ どころからその結論に至るのよ、訳分かんない！」

笑われてる、あたし。いや、タカちゃんと趣味を同じくするのって、でも強いかなって思っただけ。立場とか、気持ちとかの上で。

「トウシューズ履いて？ くるくるって？」

「あつ、それ違う、踊る方じゃなくてバレエ、バレエボール！」

なんだ、って言いながらまだ、千里笑ってるし。脚固定されてるから笑うの大変なのよ、って笑い怒りながらヒイヒイ言うのはどんなものかと。

今日もみつあみだから、可愛いね、って言ったら、頭洗えないから仕方ないのよ、って逆に怒られた。そのみつあみを揺らしてまだ笑ってる、千里。くそう、腹いせに長風呂してやる、今夜は延々とお風呂入ってピカピカに身体磨いてやる、髪だって三回くらい洗ってやるもんねーだ。

「ウケるー、想像したらおかしいー、マジ超ウケる！ ぶふっ、

」

あたしの顔見て咳き込むな。

「ごめん、ぶふふ、あー、ごめんごめん、でもなんでバレエ？ あ、タカさんがやってるから？」

「……うん、まあ」

「なるほどねー、でもさ、バレエ始めてもそのライバルのおばさんは同じポジションでもっと親しい位置にいる訳じゃない？ だったらさー、もっと別方面から行けばいいと思う、って、とりあえず告ったら？」

「ぎゃー！ そ、そ、そ、そういうのはさー、なんか、うーん、」

もっと前の。タカちゃんと出会ったばっかりだったときの。無邪気さと女子高生にだけ許されるような、厚かましさだけで接していられたときのあたしだったら、言えちゃえてたかもしれないけど。

今は、多分ダメ、だって。

だって、なんでか分かんないけど、好きになりすぎてる。
タカちゃんのこと。

「あ、咲、」

顔真っ赤、って。

当たり前だよ、今無茶苦茶ほっぺ熱いもん、血が全部集中しちゃ
ってる感じで、あつついもん病室はただでさえ室温高めに設定して
あるんだけど。

「好きなんだねえ、」

「……うん、」

「じゃあさ、余計他の男なんかにかまけてるのはダメなんじゃない
？ タカさんへの好きの辛さを他の男で発散させてたりするのはさ」
川本のこと？ 川本なんかで発散してないよ、でも、心のどっか
ではあるのかもしれない、タカちゃんがやさしくない分、川本から
甘やかしてもらって当たり前、って。当たり前、とは言わないけど、
バランスは取れてるかもしれない、とかつて。

傷付きたくないもん。痛いのは嫌だもん。身体も、心も。

「失恋するって決まってるわけじゃないし」

「……あーあ、あたしも千里くらい可愛ければなー」

「熊井咲さん、それ、私に対する嫌味かしら？」

「まさか！ って、あ、ごめん、」

可愛くても好きな人の子をお腹に宿しても、いらないうって捨てら
れちゃう女の子がいて。

「ずっきーん、謝られたら余計心の傷が！」

「わあっ、ごめんっ、あっ、また謝っちゃって、ごめっ、あっ、あ
ああっ！」

千里の傷はまだ癒えてないのに。身体のも、心のも。なのに、あ
たしのこと心配してくれてる。相談聞いてくれてる。あたしと千里
は友達としてレベルアップしたような気がする、って言ったらきっ
とまた爆笑されるだろうから口には出さないけど。

「やだ咲、謝りループに突入してるよ、バツカだー、あはははは」
「くっ、悔しいー、なんかものすごく悔しいー、」

でも結局一緒になって笑っちゃったからあたしの負けだ。

まだぶつかってないじゃん、って千里の言葉が胸に残ってる。由美さんに嫉妬してるだけで、タカちゃんのつれなさに哀しんでばっかで、あたし、まだぶつかってない。タカちゃんに対する意味のない八つ当たりで、川本まで巻き込んでるし。処女じゃなくなったの、あたし、どっかで川本のせいに思ってた感じがある。非処女になりました、って、本当は友達にだって報告するもんじゃないよね、してもいいけどさ、好きな人として、ついにやりました！ ならまだしも。

化粧だったら教えてあげるよ、って千里が言ってくれる。うん、髪も伸ばそうと思うんだけど、って言ったら、ちよっと考え込んだ顔をした。

「うーん、でも咲は長くない方がいいと思う」

「えー、なんで！」

「背、低いし。剛毛っぽいし。伸ばすより、短いままのが可愛いと思う」

「うっそー、大人っぽくなりたいんだけど」

髪伸ばしたからっていきなり大人っぽくはならないよ、って、千里は川本と同じようなこと言うし。あんまりみんなから伸ばすのは……って言われると、伸ばしたらすごく悪いみたいで切ないなー。

「あ、ねえ、今度そのタカさんとか川本さんだっけ、それとか、みんな会わせてよ、見てみたいよ」

千里が楽しそうに言ったけど、川本はいいとしてタカちゃんは会ってくれそうにないな、千里をアパートに連れて行くんならまだしも。だけどあたしは、うん機会があつたらね、って言うておく。いつか、あたしの彼氏、ってタカちゃんを紹介してみたいもんだ。

「咲、頑張れ」

「うん？ ああ、あーあー、うん、頑張る？」

疑問系の尻上がりなファイトを笑って、千里が、上手くいくとい
いねえ、と呟いた。タカちゃんのことだろう。そう、まず告らない
と。って、もう逃げ出したいけど。今更言えないよー、改まってな
んで、しかも強力ライバル出現の後のじたばたって、意味なくない
？ あたし、勝ち目なくない？ ああ、でもそうやって逃げちゃダ
メなんだな。

「恋愛の道は厳しい……」

「甘いのは見た目だけよ、今頃気付いたか、咲め」

「千里、師匠と呼ばせてもらおうわー」

「出来の悪い弟子はいらーん」

ふたりで顔を見合わせて、大きな声で転げまわりそうな勢いで笑
う。廊下を通っていたらしい看護師さんがノックして入ってきて、
「楽しそうだけでもうちよっとトーン落としてねー」って言ってっ
た。「あらー、ちょうど箸が転がっても楽しい年頃だもんねー」っ
て付け足されて、はい！ って返事したあたしを千里がもつと大き
な声で笑った。

路地裏のクマ・8 (前書き)

続きます。

タカちゃんに告るって、さてどんなことをしたいものやら。電話、は番号知らないし、メールも同じく。それにやつぱ告るのが間接的じゃダメよね、直接って方が好きって気持ち伝えたいって気持ちの方がより伝わる気がするんだけど、あ、でも手紙とかはちよつと古風でもいいかも、でもタカちゃんって手紙読むかな、字が読めなかつたら笑えるなあ。

筑前煮とカットされたオレンジの、タツパをふたつ目の前にしてあたしは頼杖をついている。日曜日の台所、お母さんだけがパタパタ動いてた。早く起きたのねえ、なんて言われて時計を見たら九時少し前で、休みの日はいつも昼頃まで寝てたっけ、って思ったりする。ただとお子様向けの日曜早朝番組はもうすべてが終わっちゃって、日曜くらいゆっくり寝かせろっていうお子様はいないもんなのかね、ってお母さんに言っただけ変な顔をされた。

「咲だつてちつちやい頃は五時だの六時だのに起きてテレビ見てたじゃないの」

「嘘ー、そうだったっけ？」

「そうよ、お母さんのことまで叩き起こして、テレビ見ていいかって聞くんだもん、勝手に見ていいから起こさないでよって思ったわよ、和美もそうだったわねえ」

子供は回復が早いから睡眠時間が短くていいってことか？ 老人は体力なくなってくるから長く寝ることが出来なくなるんだよね？ 家庭科のおばあちゃん先生が言ってたもんな、いっぱい寝られるのは今のうちだけですよーって。

ちよつと出かけるからさ、って言ったら、お母さんは何かを勝手に納得したみたいで、じゃあこれ持って行きなさいよ、ってふたつ

のタツパを用意してくれた。

「どうする、大根サラダも持ってく？」

大根サラダは昨日の晩御飯に出てこなかったなあ。うちの大根サラダは、大根が超細く切ってあって白ゴマとシソの千切りが混ざってて、ホタテの貝柱が上に散らしてある。缶詰のやつ。美味しいけどお母さん、あたしがどこに行くんだと思ってるんだろ。

「病院食って飽きちゃうって言うじゃない、あんまり美味しくないみたいだし」

む、千里のところに行くと思ってるな、やっぱり。

「そうそう、頂きもののどら焼きもあるけど、持って行く？」

「それはあたしが食べたい」

「あ、咲も一緒に千里ちゃんにご飯食べる？　じゃあおにぎり作ってあげようか？」

お母さん、微妙に会話が変だけど。

「朝ご飯代わりにどら焼き食べるよ、それに千里、和菓子とか食べないと思う」

「なんでよ、女の子はみんな甘いもの好きよ？」

「……嫌いな人もいるでしょ、あ、でも千里おばあちゃんと暮らしてるから、和菓子とかおやつに食べてるのかな？」

病院に行くわけじゃないのに、あたしまで千里のことを考えちゃった。

「じゃあ大根サラダも詰めとくわね、おにぎりも作っというてあげるわ、中身何がいい？」

「鮭とたくわんの細かく切ったやつ」

「残念、たくわんないわ」

「むーう、じゃあ昆布以外」

「残念、昆布もないわ」

「それは残念じゃないよ、お母さん」

おにぎりまで作ってもらうことになっちゃった。だけどあたしは今日、病院に行くために早起きしたんじゃないやなくて。出かけるのは他

のところ。それは、タカちゃんと一緒なんだけど、誘ってきたのは川本だった。昨日の夜、お風呂上りのあたしが部屋に戻ると、タイムリングを見計らってたかのように携帯が鳴って。

川本もちよつとだけ学習したらしい、もしもしいってあたしが出たらすぐに用件を切り出してきた。

『明日暇？』

お風呂上りの髪は濡れてて、携帯を押し当ててない方の耳のところの毛を人差し指でくるくるしてみる。髪伸ばすのやっぱり似合わないかな、それにしてもちゃんと拭けてなくて水っぱい。

「うーむ」

『ん？』

「あっ、なんでもないですよ、明日？ 明日は、」

『そう明日、タカとバレーの試合見に行くんだけど』

う。タカちゃんの名前が出たら、あたしは断りの言葉をなくしてしまうじゃないの。ふたりきりじゃなければいいかもって、学習したんだな？ あ、それとも友達との約束に彼氏連れてきちゃう子みたいな感じかな、タカちゃんに見せたいとか、あたしのことを。あはははは……って、それは困る、あたし、川本の彼女じゃないし。

『良かったら一緒にくる？』

「う、」

でもそうじゃなくてただのお誘いの可能性のほうが高いし、タカちゃんに会える？ タカちゃんとバレー見に行くの？ じゃあ、バレー大好きなタカちゃんはまた顔崩して嬉しそうな表情をしたりするのかな、それは見たい、バレーより、あたしはタカちゃんを見たい。

「……………あ！」

でもちよつと待てよ、バレー？ バレーっていうとちよつと嫌なのも思いつくんですけど、それもオプションでついてきたりしちゃうのかしら。

『この前いた由美さんって覚えてる？』

「ぎゃー、なんてこと！もしかしてダブルデートとか言う？それは嫌、絶対嫌、死んでも嫌、なんであたしが別の人とデートするタカちゃんを横目に川本と一緒にいなきゃなんないの、絶対絶対嫌でも由美さんとタカちゃんがふたりつきりになるのも嫌、それくらいなら邪魔してやった方がいいのかな、邪魔なんてしたらタカちゃん、あたしのこと嫌いになっちゃうかな、なるだろうな、それは困る、どうしよう。四人並んでバレー見るの？それって、タカちゃんの隣は由美さんでしょ？由美さん、川本、あたし、タカちゃんとかって並びじゃないでしょ？最悪の場合、あたし、川本、由美さん、タカちゃんってなるでしょ？端っこ同士になっちゃうじゃん。」

「よ、四人で行くの？」

「は？ああ、違う違う、由美さん達は別でママさんバレーのチームも作ってるんだけど、明日はそっちの地区リーグでさ、応援に行くの、タカとオレと。で、良かったら咲ちゃんもどうかかな、って」
「なんだ、ダブルデートじゃないのね、でも結局由美さんは存在するのね。応援。応援か、こっちより断然有利な立場に立ってる女を応援するのって嫌だな、バレーの応援とはちっとも関係なくても。どうせ勝ったらタカちゃんは嬉しそうにハイタッチとかしてよくやったって言ってあげるんだろうな、負けたってあたしには聞かしてくれないような甘い声で慰めたりするんだろうな、あたしもバレーしようかなあ。」

「……あれ、また都合悪かったりする？」

「えっ、あ！あああ？あー、えっと、うーんと、行きます、うん、行く、行く行く、明日、行きます、タカちゃんと……と、遼さんと」

「あ、本当？やった、じゃあ家まで迎えに行くよ！」

バレーの試合は一時かららしい。午前中からやっているけれど、結構大きな大会になるから、リーグが上のチームは試合が午後から予定されている、と川本は言った。

「いいですよ、わざわざ。遠回りになるでしょ？」

川本がどこに住んでるか知らないけど、そう言ってみる。

『いや、どうせタカを迎えに行くし』

「あ、じゃあそこで待ち合わせしましょうよ、みんな。あたし、自転車ですんなに遠くないですから、タカちゃん家」

『でも、』

バレー見に行く前にタカちゃんと会えるじゃん、あたしは遠慮して言ってるんじゃないかってそうしたいんだってば、分かれ川本。

「じゃあ決まり、明日楽しみにしてますね」

押し切ってそのまま通話終了ボタンを押してしまった。待ち合わせの時間を聞いていないことに気付いたけど、どうせ早くからタカちゃんの家に行けばいいだけの話だ。その時は告白とかしないだろうけど、だってその後で川本も来るし、バレーも見に行かなきゃならないし、万が一気まずくなったら困るし。

何を着ていこうか考えちゃってて、結局昨日の夜は寝るのが遅くなったというのに、朝は楽しみで早く起きちゃってる。頭の中が子供みたい、遠足前の小学生そのまんま。

「咲、卵焼きも焼いてあげようか」

「お弁当になっちゃうじゃん」

「いいじゃない、じゃあ冷凍のから揚げとポテトも揚げちゃおうかな、あと何かあったかしらー」

お母さんが楽しそうに冷蔵庫を覗いてる。千里のところに行くんじゃないんだけどな。でもまあ、お弁当作ってもらったらタカちゃんと食べればいいか。タカちゃんいっぱい食べるかな、足りなかったら非常用カップラーメンでも食べてもらおう。

見に行くバレーの試合は由美さんが出てるやつなのに、あたし、すごいはいしゃいじゃってる。タカちゃんに会えるから。

好きな人って、会わないときの方が強く好きって思うものなのね、会うとちよっとしたこと傷付いたりショック受けたりしちゃって、もういい嫌い！ って思ったりするのに。嫌いになれないんだけど。

会わないときの方がいいところばっかり思い出す。会いたい会いた
いって、胸がきゅーんとする。あたしのオーラ、きつとピンク色し
てるな、今。吐く息とか。ピンクって、恋する女の子のためだけに
存在する色だと思う、あたしはピンクの服とかシャツとかを平気で
着てる男の人が嫌い。似合ってたもさ。それは女の子のだから、取
っちゃダメだよって言いたくなっちゃう。恋する女の子だけが、ピ
ンク。恋する男は、何色だろう、薄いオレンジかな、真珠色に近い
黄色とか。

「桃の缶詰があつたけど持ってく？」

「それは……いらない」

タカちゃんの部屋、缶切りないもん。

「じゃあ桃缶はゼリーにしようかしらね」

お母さんはおやつによくゼリーを作ってくれた。ゼラチンのじゃ
なくて、寒天のやつ。食紅や黄粉や緑粉で色をつけたり、缶詰のシ
ロップを使って中身を細かく刻んで一緒に固めたり、コーヒーや紅
茶でも作っていた。あたしの思うゼリーは、だからぶるんぶるん震
えるようなやわらかいやつじゃない。どこまでも透き通る、セロフ
アンを何枚も重ねたような、食べられるガラスのような、脆いんだ
けど硬いゼリー。寒天のゼリーはゼラチンのゼリーより冷たく感じ
る。静かで、ちょっと大人の顔をしてる。

ゼリーあたしの分もちゃんと取っておいてね、と念を押したらお
母さんが笑った。子供みたいになあに、って。

お弁当作ってもらって、タカちゃんの家。

素敵だな、とつい口に出しちゃって、笑ってたお母さんを不思議
そうな表情に変えてしまったので、代わりにあたしが笑っておいた。

タカちゃんの部屋の匂いは、タカちゃんそのものの匂い。

男臭いのにあたしは慣れていない。お父さんはおっさんだし、弟
はまだ小学生だし。フェロモンいっぱい出して、メスを仕留めてき

て孕ませて自分の子孫を繁栄させるための、強い意思のような匂い。川本はそんなに男臭くなかったな、ひよる男で男性ホルモン少なそうだからだ、きつと。

お母さんが作ってくれたお弁当を持って、自転車をかつ飛ばしてタカちゃんの家に行った。元々スピードを出すのは好きだけど、目的地に着けば好きな男がいる、っていうのが余計にあたしを急がせてた。風になる感じよりもっと早い、ワープする感じ。自転車に乗ってて叫びだしたくなる。声にならない声で、奇声、っていうやつ。楽しいって気持ちと幸せって気持ちを足して、それをスピード上げて叫んだら既成の単語にはならないと思うから。

「コグマは元気だな、」

十時過ぎにタカちゃんの部屋に着いたとき、まだ彼は寝てた。紺色ジャージの下に、白いＴシャツ。バボちゃんの柄で、さすがバレっ子、って思う。寝ぼけ顔のタカちゃんはまんま冬眠のクマ。しかし、玄関の鍵はかけておいたほうがいいと思うんだけど、タカちゃんは無用心すぎるんじゃないかしらん。

「お母さんがお弁当作ってくれたの、だから持ってきた」

「お前が作ったんじゃないかって、お前の母ちゃんか」

「なんで？ あたしが作ったのが食べたかった？」

「コグマは食いモン作れるのかよ」

「作れるよ、失礼な！ あたしの行ってるのお嫁さん学校だよ、調理実習とかばっかなんだから、カレイの煮付けだって肉じゃがだって、アジの三枚おろしだってできるんだから、ピーマンの肉詰めとか春菊の胡麻和えとか蓮根のきんぴらとかも！」

お嬢様学校なら聞いたことあるけど、嫁さん学校ってのははじめて聞いたな、とタカちゃんが笑う。Ｔシャツの下から手を突っ込んで、お腹をぼりぼり搔いてる。寝起きは無口になる人なら知ってるけど、タカちゃんは寝起きだとよくしゃべってる、変な人だ。

「嫁さん製作学校か、それにしちゃ嫁さん不足の男共が多いぞ」

「お嫁さん学校の卒業生だって、誰のところでもお嫁に行くって訳じ

やないんだからさ」

「じゃあコグマは嫁不足のところに行つてやれ、喜ばれるぞ」
少子化問題にも役立つかもしれない、なんていい加減なことを言いながらも、タカちゃんも冷蔵庫からペットボトルのお茶を取り出してきてあたしに渡してくれた。でも、二リットルのをそのまま渡されても、困るんですけど。

「ええつと、タカちゃんも飲む？」

「お前が飲んでからでいいぞ」

「つて、直接かい！……コップなら後であたしが洗うからさ、なんか出そうよ」

「コップなんてもんはこの家にないなあ」

湯飲みとかがどっかにあつたつけ、とタカちゃんは冷蔵庫脇の食器棚をごそごそやっているけど、食器棚とは名ばかりでカップラーメンだのインスタントの袋ラーメンだの、レトルトのカレーだのチンするだけで食べられるご飯だのが放り込まれている。炊飯器はなくても暮らしていけるけど、電子レンジはないと辛いんだろうな、でも普段はコンビ二弁当とかばかりなのかもしれない、だってあのレンジでチンするタイプのご飯、賞味期限切れてたもん。ああいうのって結構長持ちするんじゃないの？

「ないから茶碗でもいいかー？」

「茶碗？」

タカちゃんが持ってきたのは、男の人用のでっかいご飯茶碗だった。うちのお父さんのより大きい。薄い灰色と濃い灰色の大きな四角が交互に描かれてて、あたしが家で使ってるウサギ柄のクリーム色の茶碗と比べたら、三倍以上は平気でご飯が入りそうだった。

「ほれ、これ使え」

「……これ、キレイ？」

「気になるなら洗つて使えばいいだろ」

珍しくむすつともせず、洗え洗えと笑ってるし。寝起きが悪い人とか寝起きが良い人ってのはいるけど、寝起きが普段より機嫌い

い人なんて聞いたことがない。

「タカちゃんのは？」

「俺はそのまま飲む」

「えー、やだ、それはワイルド系となんか違うー、ただのずぼら系だよー」

「俺はいつもそうなの、牛乳でもなんでも！」

タカちゃんがよくしゃべるからあたしは嬉しくなっちゃって、やだやだ言いながらタカちゃんのご飯茶碗にお茶を入れる。三々九度の杯ってこういうのじゃない？ って思うと照れる、なんだか素敵過ぎる。

硬そうな黒髪に寝癖。目やにがついてて、笑える。無精ひげがまだらにはえてる、まだ顔も洗ってないんだな、じゃあ歯も磨いてないだろうな、仕事は疲れるから休日は寝てたい派なのかも。

「何にやついてんだよコグマ」

「別に、だつてタカちゃん変なんだもん、なんか今日口数多いし」

「そうかー？ あー、腹減った、お前弁当持ってきてんだろ、それ食っていいんだろ」

もちろん、って背負ってきたリュックバックからバンダナで包んであるお弁当を取り出す。筑前煮のタツパと、卵焼きとから揚げが入ってるタツパと、大根サラダのと、オレンジの櫛切りのやつ、フライドポテトのタツパには隅にケチャップとマヨネーズも入れてあった。おにぎりはひとつずつアルミホイルに包んでくれてあって、四つ。バンダナの包みはみつつの塊になってて、それぞれ赤と緑と黄色のだった。信号みたい。

「おっ、これひとり分？」

「ちっがーう、あたしも食べるよ！」

「マジで？ 俺、これだけ全部食っても足りん」

「タカちゃんってそんなに食べるの？」

「コンビ二弁当ふたつとカップ麺いっこ食べて、腹八分目くらいになる」

エンゲル係数高そうだ、給料のほとんどはご飯？ それとも、男の人ってそれくらいは平気で食べるもの？

「エンゼルけい、何？」

「エンゲル係数だよ、家計での食費が占める割合！」

「おー、難しい言葉知ってたな、コグマは」

「それくらいは勉強するんだよ、学校で。家庭科が主だもん」

「嫁さん学校だからか？」

「そう、お嫁さん学校だから」

タカちゃん、あたしのことお嫁さんにしてくれないよーって、今冗談で言ってみちゃおうかな、あ、考えると照れちゃうな、こういうのって自然に口から出さないとダメなのかも。

「たっ、タカちゃん、あたしさ、」

「おー、コグマも嫁さん学校行つてんなら嫁さん候補かー。あ、川とどう、上手くいつてるか？」

「……は？」

川と、って、何、うちら付き合ってたりするわけじゃないんですけど。

変な顔したあたしに気付きもしないで、タカちゃんは筑前煮のツパを開けて指でつまんでる。旨いじゃん、って、たけのことが蓮根とかゴボウとかコンニャクとか、もぐもぐ咀嚼してる。

「川はいい奴だぞー、あんまし食わないけどな、女つくらい食が細いんだよなー、由美の方がまだ食うし」

川の好物知りたいか、ってタカちゃんが言うけど、引つかかったのはそっちじゃなくて。今、なんかさり気なく呼び捨てにしなければ？ その、ほら、あの。

由美さんの、こと。

あれ、タカちゃんってともと彼女のこと呼び捨てだったっけ、記憶がないんだけど。呼び捨てってずるい、親密な感じがし過ぎて。男と女だったら尚更、学生同士でもないんならもつと。

嫌な感じに鼓動が早くなる。

「そついやなんでお前、俺ん家にいるんだよ、川が迎えに行くんじやねえの？」

「……タカちゃんの家で待ち合わせだからだよ、そう約束したんだもん、それに何時に待ち合わせだったか知らないの、一時にバレーの試合が始まるらしいのは聞いたんだけど、」

「なんだよ、俺ん家を待ち合わせ場所にすんなよな。なんならコグマとふたりで行きや良かったのに」

行きや良かったのに、って。

「タカちゃん、あたし別に川本とは、」

付き合っていないよ、って言いかけたけど途中で言葉に詰まる。川本って、タカちゃんに何か話してる？ あたしとエッチしたことから。それをタカちゃんが知ってたら、あたしは川本と付き合ってるって思われちゃうよね、違うって否定したら、タカちゃんはあたしを軽蔑した目で見るよね。きつと。

卵焼きを口に放り込んで、甘いやつだ、ってタカちゃんが驚いた顔をしてる。おにぎりも三口くらいでお腹の中へ消してしまってる。タカちゃん、違うよ、あたし、川本と寝ちゃったけど、でもそれは違うの、違わないけど、あたしが好きなのは。

頭がぐらぐらして、でもここで倒れても困るからお茶碗からお茶を飲む。薄い陶器が唇に当たって冷たい。

お茶は、味がしなかった。

「しつかし川も犯罪だよな、コグマ幾つよ、女子高生だろ」

そついや制服じゃないな今日、って言われた。ジーンズにふりっふりの白のスカート重ね着してる、一応女の子らしいのも見せときたいかな、とかって思ったんだけど。でもタカちゃん、あたしの服のこととか言うの初めてで。

「タカちゃん、」

「なんだよ、ああ、お前早く食わないと全部食っちゃうぞ」

「違くて、」

今日のタカちゃんなんか変、って言おうとしたけど、ピラリラピ

ラリラって電子音が近くで鳴って、あたしの言葉がそこで途切れる。一瞬なんだか分かんなかったけど、タカちゃんが絨毯の上に何冊も転がってるバレー雑誌の間から携帯を取り上げたから、初期設定のままの音なんだ、って気付いた。タカちゃん、今時いい年したおっさんでも着メロぐらいは使ってるよ？

「もしもし、おー、どした？」

つまめないから大根サラダはそのまま残ってる。青紫蘇ドレッシングをお母さんがお醤油の容器に詰めてくれたから、あたしは手を伸ばして容器の緑色のキャップを外そうとして。

「分かった分かった、持つてく、それだけでいいんか？ 由美はそういうところ案外抜けてるよな、おう、大丈夫だって、いや、川が乗っけてつてくれる」

今。

由美、つて言った？

それ、タカちゃんの携帯で。あたし、その番号知らないんですけど。

確かに、同じバレーチームの人だし、連絡先とかし知つとかなきゃなんないだろうし、つて自分に言い聞かせるけど。なんか引つかかる、ドキドキする、嬉しい方じゃなくて、嫌な方で。悪い点数つて分かってるテストが返ってくるのを待つてる時みたいなの。

千里、千里、あたしつて今なんかヤバイ？ あー、テレパシーと可使えたら、絶対便利なのに、今がまさに。

とろりとやわらかな顔で、タカちゃんが電話を逆の耳に持ち替えた。電話の相手は由美さんで。右の耳からも左の耳からも相手の声を自分に染み込ませようとしてる動作に見えて。

あたしはドレッシングの容器、キャップに指をかけたまま固まっている。動かないと不自然でしょ、つて、頭のどっかで声がするのに。動けないの。

「最初から見ると、大丈夫、まかせる応援。初戦どこよ、え、パール横田？ あー、あそこか、あそこおばちゃんばっかだけど結

構強いんだよな、うんうん、知ってる、」

タカちゃんがこつち見て。

由美さん？ って、あたしが首を傾げるジェスチャー付きで目を見ながら唇を形作る。

おう、って。

ゆっくり縦に頷いて、目を細めるのって、タカちゃん、ずるいよ。「川が来たらすぐ行く、おう、飯食ってるよ、コンビニのじゃない、え？ あー、いや、おにぎりとか。まだ川きてない、おう、今？

今は、、」

ひとりで家、って。

タカちゃんが言った。

ひとりで家？ それって、ひとりで家にいるってことだよな？

ひとり？ じゃあここにいてるあたしは何？ 由美さん、あたし知ってるじゃん、別に知り合いになんかなりたくないけど、あたしと会ったことあるじゃん、今タカちゃんひとりって言った、それってあたしがここにいてるってことを否定したんだよね、なんで？ なんてあたしがここにいてることを知られちゃマズイの？ それって、理由はひとつしかないよね、少なくともあたしが思いつく理由は、たったひとつしかない。

あたしの頭、また真っ白になるけど必死で首を振った。真っ白にしちゃうと楽だけど、楽になってる場合じゃないんだもん、絶対。

「タカちゃ、」

「後で行くから、おう、頑張れよ、飯食い過ぎないようにな、バナナとかにしとけよ、あとドリンクちゃんと取っとけ、じゃあまた後で」

あたしが声を出したら、被せるようにちょっと早口になってタカちゃんが一気にしゃべって電話を切った。

「コグマー、」

電話切ってからタカちゃんが少しだけ非難めいた声を出す。

「由美さんと、付き合いだしたの……？」

「あー？」

携帯をまた絨毯に転がして。指先から力が抜けちゃって、あたしはキヤップを開けないままドレスリングをテーブルにそっと置いた。タカちゃんは筑前煮をつまむ。ニンジンばかりが残る、あんまり好きじゃないのかな。

「今の電話、由美さんでしょ？」

「おう」

照れくさそうになんで笑うの？ あたしの知ってるタカちゃんは笑わないよ、不機嫌そうだったり無表情だったり、あたしに背中向けてテレビ見てたり、面倒くさそうだったり睨んだり。タカちゃんの鋭い目、好きだけど、そんなやわらかく笑ったりするのなんて、そっちの顔を先に知ってたら笑った顔の方を好きになってたに決まってるんじゃない。

「タカちゃん、」

「あー、付き合ってるっていうか、まあ、……あー、照れくせえな、つか、まあな」

「……付き合ってるの？」

「何度も聞くなよ、コグマだって川と仲良くしてんだろ」

いつ？ いつそんな関係になっちゃったの、タカちゃん、なんでいきなり、どうして、なんで？ 頭の後ろをひっぱたかれたみたいに脳みそがぐらんぐらん揺れてる、嫌だ、なんで、まだ、だってあたし。あたし、タカちゃんに。ぶつかってないよ？ いきなり取り上げられちゃうの？

「タカちゃん！」

「なんだよコグマ、タカちゃんタカちゃんって、俺の名前は大安売りかっての」

「あたし、川本と付き合ってるんじゃないよ」

「……は？」

「ゴボウがつままれたまま宙ぶらりんになる。」

「だって、あたしの好きなのは……！」

勢いそのまま言うのって。

あんまり良くない、千里が隣にいたらきつと止めてる。でもここにはあたしとタカちゃんしかいないから。

「タカちゃんなのに！」

タカちゃんの指からゴボウがこぼれた。テーブルにぶつかって、軽くはねて転がる。唇がぼかんと開いてて、あたしはほっぺに血が集中しちゃったのか首から上が燃えるように熱かった。

「……コグマ？」

「あたしはタカちゃんが好きな、ずっと好きだったの、なんで由美さんとなんか付き合ってたのよ！」

「おい、だつてお前は川と、」

「川本となんか付き合ってたない、あたしの好きなのはタカちゃんだつてば！」

ぼろつて。

視界が曇る間もなく頬に涙がこぼれて、それまでうんと熱かった。ここで泣くのは意味ないし、ちゃんとしゃべんなきゃって思うのに、転がるように涙が。嗚咽が。

「タカちゃんが好きなのに、好きなのに、なんで、なんで由美さんと付き合つたのよ！」

「コグマ、」

「なんで？ タカちゃんは、大人の好きななの？ あたしだってもう、大人になつたよ、本当だよ！」

襟と、ボタンのところがフリルになつてるブラウス。あたしは最初のボタンに指をかける、タカちゃんはまだ口を開けてこつちを見てたけど、胸の真ん中までボタンを外したとき、慌てたように手を伸ばしてきた。

「コグマ、何してんだお前っ、」

「もう大人だもん、タカちゃんなんで由美さんなの、あたしじゃダメ？ あたしだつてお料理作ったりいろいろできるよ、バレーだつてこれからやってもいい、タカちゃん、あたしタカちゃん好きだも

ん、もう大人だもん、」

言ってて自分で訳が分かんなくなる。ブチ、って音を立てて、ポタンが一個千切れて転がった。焦ってて、指先に変な力が入る。

「コグマっ!」

タカちゃんがテーブルのこつち側にきてあたしの腕を取ったけど、嫌だって振り回して放させようとした。ああもつと。脱ぎやすい服にすればよかった、あたしに欲情してよタカちゃん、あたし、本当はタカちゃんの手で大人になりたかったな。

「何してんだ、コグマ!」

「あたしだって大人だもん、じゃあ一回だけ、タカちゃん一回だけでいいから、あたしとエッチしてよ、由美さんと付き合っちゃうんでしょ、じゃあ一回だけ、一回くらいいいじゃん、タカちゃん、タカちゃん、」

「バカっ!」

怒鳴られて、殴るんなら殴ればいいじゃんって思ってたけどタカちゃんはあたしの両腕を掴んで後ろに捻り上げた。痛いって叫んだけど、放してくれなくて。あたしは全身でもがく。涙で顔がびしょびしょだった、格好悪くて笑えるかと思うくらい、泣けて。

「コグマ、やめろって、な、やめろ」

手が離された次の瞬間、後ろから抱き締められた。

タカちゃんの匂いが、すごく濃い。

体温が、薄いTシャツを通して、あたしの背中に伝わる。

「おいー、俺だって男だぞ、目の前で女に服脱がれてみるよ、理性飛ぶって」

「飛ばせばいいじゃん、なんでダメなの、理性飛ばしてよ!」

「飛ばせばいいじゃんって簡単に言うなよ」

あのなあ、ってタカちゃんが苦笑してる、笑うときの息を、あたしは耳の後ろで感じる。そしたら、急に身体から力が抜けてあたしは崩れそうになる。タカちゃんが抱き締めたままだったから、形はそのままだったけど。体重がいきなりかかったみたいで、タカちゃ

んが小さな声で、おっ、って言った。

服を脱げば、って。

脱力しながらも思ってた、だって一度寝ただけで川本はあたしに惚れたじゃん、タカちゃんだって、一度あたしと寝ちゃったら。もしかしたら、今は一ミリもない勝ち目だけど、由美さんに勝てる大逆転の可能性が。もしかしたら。

「……………って、」

「『て』？　なんだコグマ、『て』ってなんだ？」

「うわわわわわあーん、タカちゃんのバカー！」

「おっ、バカときたか、俺から見ればお前のがバカだぞ」

やさしく言わないで、あたしのものになっしてくれないくせに。

タカちゃんが寝起きだから機嫌がいいっていう不思議な体質なんじゃなくて、彼の機嫌を良くさせているのが由美さんの存在なのかもしれないって思ったら。あたしじゃダメでしたって再確認させられてるようで哀しかった。

「　コグマ、」

タカちゃんから抱き締められた形でどれぐらい泣いてたんだろう。ひっきりなしだった嗚咽が間隔を開けてきて、その頃になつてやつとあたしはほっぺの涙を手でぬぐったけど、ほとんどが乾いちやつてた。

「俺は手が痺れた、コグマ」

笑ってタカちゃんが手を離す。あたしの胸の下辺りで組まれていた手がなくなると、そこが急に空気に晒されて冷たく感じた。放しちや嫌だ、って、小さな声で呟くけど、それはタカちゃんの耳には届かない。

あたしはのろのろと身体ごとタカちゃんに向けて、ピンクのバボちゃんが描かれている胸のところに抱きついた。タカちゃんの匂い温度。ここに、確かにいるあたしの好きな人。

タカちゃんは抱きつかれるままにしてた。頭とか撫でなさいよ、肩とかに手を置きなさいよ、って思ってた、そのどれもしないタカち

やらしさにあたしはまた涙がにじんでくるのを自覚する。いつの間にも、こんなに好きになっちゃったんだろう。あたし、すごくみっともない。タカちゃんが好き過ぎて。

「コグマ、俺のこと好きだったんか」

「……し、知らなかった、の？」

「知らん、全然知らんかった。それにお前、川と付き合ってたんじゃんか」

「……だから、それ、違う、」

あんな、って、タカちゃんが静かな声で言う。好きになってくれてありがとうな、って。

驚いて顔を上げたら、ものすごく照れくさそうなタカちゃんが見えた。

「タカちゃんが……ありがとうなんて言った……」

「コグマ、なんかむかつく言い方すんなー。あんな。好きになつてくれたのはありがたいけど、俺とお前はダメなんだよ、年の差がありすぎるし」

「川本だってタカちゃんと同年じゃん……」

「おっと、ああー、それはまたそれで置いといて、だな。あー、俺さ。実はもう子供いたりすんだよな、離婚してるから一緒には暮らしてないけど、」

知ってる、川本から聞いたから。でもそれは言わない方がいい気がして、あたしは黙っておく。

「コグマはまだ若いんだから、俺みたいなおっさんじゃなくてちゃんとしたのと付き合え」

「……タカちゃんはおっさんじゃないよ、」

「そりやどうも」

「あたしはタカちゃんがいいもん、タカちゃんが好きなんだもん、年の差とか子供がいるとかどうのこうのので遠回しな振り方されたって、納得しないよ？」

「そりや困った」

傷付けるのは苦手なんだ、って呟いた、その言葉が充分にあたしを傷付けてるのも気付かずに。タカちゃんらしい、と思っであたしは苦笑する。触れているあたしの部分が肌に刻むようにタカちゃんの体温を記憶しようとしている。

「ごめんな、俺はお前を選べない」

「……由美さんが好きだから？」

「おう」

「あたし、頑張るよ？ タカちゃん好みになれるように、今からうんと頑張るよ？ いいお嫁さんとかにもなれるよ？」

「ごめんな」

ぼん、って、頭に手が置かれた。大きな手。

「……嫌だ、」

「嫌だって言うなよ、子供じゃないんだから」

「子供だよ……、」

「そうか、うーむ、でもそんな、嫌だとか言わないでくれよ、俺だっつてすごい困ってるんだぞ、今」

振られる胸の痛みに比べて困るのなんてなんだい、それくらい我慢しろよ。

コグマ、って、頭に置いた手で、タカちゃんは恐る恐るな感じで髪を撫で始める。

髪伸ばしたかったのって、大人っぽくなるためなんじゃなくて、タカちゃんに撫でてもらえる時間を長引かせたいからだっただのかな、なんてちよっと思っただ。

「ごめんな、コグマ」

「……じゃあキスして」

ぼろ、と出てしまった言葉に自分でも驚いたけど、タカちゃんは目がまん丸になってしまっていた。あんまり慣れてないんだな、こういう状況に、というより、女の人に。これでよく子供作って結婚したり離婚したりしたもんだ、って、可笑しくなってくる。

「おっ、お前そういうのは、」

動揺してるタカちゃん胸に、猫みたいにあたしは頬を摺り寄せ
て。

「……キス、一回だけでいいから」

って、消えちゃいそうな声で、でもちゃんと口に出す。

戸惑っていたタカちゃんはしばらくあたしの頭の上で手を止めた
ままでいたけど、あまりの動きのなさにあたしがそつと顔を上げた
とき。

肩に手が置き直されて、そつとあたしはタカちゃんから剥がされ
た。

ひとつ大きなため息を吐いて。タカちゃんが決心したような顔の
まま唇をやわらかく持ち上げる。

次の瞬間にはタカちゃんはあたしの目の前、鼻先が触れ合いそう
なくらい近くに顔を持ってきてて。

「コグマ、目くらいつぶれ」

「あつ、うん……」

言われて慌てて目を閉じたら、すぐに唇は重なってきた。タカち
やんの匂いはますます濃くなって。川本とは全然違う、結構乱暴な
キスだった。肉食獣みたいな。唇と一緒に、軽くだけど前歯同士が
ぶつかった。あたしの口の中、荒らしまくって。キス、っていうよ
り、唇が重なった、っていうより、噛み付かれたみたいなくちづけ。
タカちゃんらしかった、へたくそだと正直思わないでもなかったけ
ど、嬉しくて。また泣けそうだった、タカちゃんの唇は体温と同じ
で温度を高くしてて、このままあたしは溶けちゃいたいの、って、
やっぱりダメだよ好きだもんタカちゃん、って。思った。タカちゃ
ん。あたしのものにならない人、でも、すごく好きなの、今も、こ
の瞬間全身全霊を込めて、あなたのことが。

路地裏のクマ・9 (前書き)

これでおしまい。お付き合いありがとうございました。

病院の売店に置いてある、チロルの林檎クリームクレープが好きで。両方ともバターの味が強くて口に入れた一口目は、う、ってなるけど、すぐに生クリームの甘さとシロップでぐずぐずになってるスポンジケーキが口の中で混ざって、その後で煮林檎のシナモンいっぱいの匂いがしてきて、食べててうんと幸せになる。

「あー、やっとだよー」

松葉杖をついてひよこんひよこん歩いている千里は、あたしに林檎クリームクレープと苺のワッフル、抹茶とあんこのワッフルとキヤメルクリームクレープとダブルチョコレートクレープの入ってるビニール袋を持たせただけで、自分の荷物はリュックで背中に背負った。

自転車を押して、あたしは千里の隣を歩いている。彼女に合わせてゆっくり歩くのって、結構変なところに力が入る。

「持つよ、荷物」

「うん、でももうほとんど先に持ってつてもらったし」

数日前までしょぼくれたような雨がずっと降ってたのに、千里の退院日だけいきなりキレイに晴れた。日頃の行いが悪すぎるから、こんなときだけでもって神様が同情してくれたんでしょ、って千里が言うもんだからあたしは笑っちゃったけど。

「はー、しかし一カ月半の病院生活って暇だったけど、こうしてみるともつと長かった気がするよ」

脚固定されてたしね、って言ったら、千里が頷いた。

「動けないのってマジ辛い。……ありがとね、何度も来てくれて」

「あたしこそ、病人に相談事ばっかしててごめん」

「いや、病人じゃないし、私」

「あ、怪我人か」

「そうそう、殺されかけた怪我人」

あはははは、って笑い声が晴れ渡った青空の下で響く。白い雲が綿飴みたい。

病室から荷物をまとめて出る前に、千里のお義父さんをはじめて見た。背の高い、血は繋がってないはずなのにどこか千里に似た感じの、顔が小さくて静かそうな人。義父っただけで、勝手に助平そっうな顔のおっさんを想像してたあたしは、思わず心の中でごめんなさいって言った。

お義父さんはひとり来ていて、千里にやわらかな声で、退院手続きはすませたから、と告げた。送って行く、と言う彼の申し出をどうして千里は断ったんだろう。

「帰ったらおばあちゃんにお腹の子供のこと言わないとなー」

「え、なに、まだ言っただけなの？」

「言っていない言っていない、孫娘がいきなり脚の骨折って入院、って時に、ついでに妊娠もしてますよー、なんて言ったらおばあちゃんひっくり返っちゃっよ」

「……退院してきた孫娘が、実は妊娠もしてました！　って言ったってひっくり返ると思うけど」

千里のお腹はまだ目立たない。ゆったりした服を着てるせいもあるんだろうけど、手足は細いし顔は小さいし、このお腹にもうひとつ命が入っているとはきつと誰も想像しない。

どうするの、って、聞くのが親切なのか聞かないのがやさしさなのかちょっと悩んで、やさしさじゃないよな、あたしは何にもしてあげられないし、と思いつつ聞いちゃった。千里は、可愛い顔して笑って見せて、分かんないよまだ、って答えただけだった。怖くないのかな。お腹に赤ちゃんがいること、恋人だと思ってた男が自分を高いところから突き落としたこと、脚がまだ完全じゃないこと

これからリハビリして、一年くらいかけて治していくんだって言った、いろいろ。

「あ、学校、」

「うん、出席日数さえぎりぎりなら、あとはテストの点と課題レポートの提出とかでどうにか留年なしにしてくれるって担任言ってたみたいだけど。でも、妊娠してちゃ退学だね、あそこ一応お嬢様学校だし」

黙って墮ろしちゃえば、バレなければ、つてのは、今度は思ったけど言わなかった。そんなに簡単な話じゃないし。まだ生まれてなかつたって、お腹に存在してる時点で赤ちゃんは命で、あたしの言うおとうとしてることは殺人で。ひどい言い方をすれば。中絶に反対とか宿った命はすべて生まれる権利があるとか、そんなのは主張する気もないし、妊娠したって育てていけないなら無責任に生まれちゃうよりは墮ろされちゃった方が幸せなのかもしれないし、レイプされて子供ができちゃった人なんて、いくら自分の血が半分つて言つたつて産みたくないだろうし、生んだとしてもその子を愛せないだろうし。

でも、千里の中に千里の子がいるなら、あたしはそれを墮ろしたつて聞いた瞬間、きつと千里を半分失くした気分にはなつちゃうんだろうな。

「私、実感沸かなさ過ぎててさ。赤ちゃんもだけど、骨折つたのもバカすぎんのかな、どーにかなるんじゃないかなーって思うだけなんだよね、ダメかな」

ゆつくり病院の正面門に向かって歩くあたし達の横を、車椅子の人が通り過ぎていく。

あの日。

タカちゃんに我儘を言つてキスをしてもらった日。

あたしは結局バレーの試合を見に行かなかつた。由美さんを見たくないのもあつたし、タカちゃんとそれ以上一緒にいるのも辛かつたし。

思い返してみれば、もつと言いたいこともあつたし、もつと上手くやれたんじゃないかって後悔するところもたくさんあるけど、ど

うあがいてみてもタカちゃんは結局あたしを選ばなかったと思う。
『バカだね、なに弱気なこと言ってるのよ、これからが本番！ 振られても一度でめげるな、何度も行くの、男つてのは女より惚れやすくできてるし、自分に気がある女をほいほい手放したりはできないんだから、本能的に！』

千里はそう言ってくれたけれど。きつと千里もあの恋愛講座の番組見てるんだな、深夜の、服着てるんだか布巻いてるんだか分からないようなお姉ちゃんがいっぱい出てくるやつ。でもあたし、再挑戦を今すぐ、って気分にはなれない。タカちゃんのどこが好きだったんだろうって考えるよりは、今もタカちゃん好き！ としか思えなくて、でも振られたのは一日寝ても三日寝ても一週間寝てもちつとも薄れてくれなくて現実感だけありありと主張させて、あたしの胸は痛みまくってた。夜になるともつと辛くて。いきなり地面が消えちゃったみたいに不安定になって、なんでなんでタカちゃんどうしてあたしじゃダメなの、って叫びたくなくて今すぐ会いに行きたいってぼろぼろ泣いて、嗚咽が漏れて家族に聞こえるのが嫌で自分の腕を噛みまくって。今もあたしの腕は歯形だらけ、青くなったり紫になったり薄れて黄色になったり、だけど意外と人間の皮膚って丈夫で、そんなに簡単に食い千切ったりはできないもんなのね。

タカちゃんとキスした日、大人になったらまた遊びにきてもいいかって聞いた。髪を伸ばすから、由美さんより魅力的になってたらあたしを迷わず選んでよね、って。タカちゃんは笑いながら首を横に振ろうとしたけど、嘘でもいいからうんって言つとけって、無理矢理うんって言わせた。

『髪長くなったら女っぽくなるかもな』

タカちゃんはそう言って。あたしの髪をもう一回撫でた。だからあたしは、もうこの髪を切らないって決めた、タカちゃんが撫でたこの髪、タカちゃんの手を覚えてるこの髪を。

タカちゃん。

路地裏のアパートに住む、あたしのヒーロー。

車にぶつかっても平気な、クマさん。

あの日のキス、へたくそだったけど忘れない、そしていつか、また。ねだりに行くからね、そのときまでには、あたしがキス、上手になっっておくから。

「脚がこんなじゃなきゃ、咲の後ろに乗っけてもらうのになー」

「あ、バス一緒に待ってたげる」

「バス座れるかなー、なんかバス乗るのとかって久しぶり、あれって遠足気分にならない？」

「あー、なんか分かる、バスってそうだよ。っていうか、千里は怪我人だから席譲ってもらえると思う」

「そっかな？」

相変わらずおさげにしてあって、眉毛も描かれてない、化粧もしてない、っていう千里はちょっとだけ幼い横顔をしてる。

「私が学校行かなくなっても、うちに遊びにおいでね。化粧教える約束、覚えてるよ、ちゃんと」

「あー、化粧！ ……する間もなくタカちゃんと終わっちゃったし ……」

「まだ終わってない！ これからこれから、まだまだこれからなんだから」

まだまだこれから。

そっかな、これからかな。

そうだね、これからだといいな。

「川本にも謝った方がいいかな」

「何を？ あなたと寝たとき処女でしたが、他に好きな人はいるのであれば特別でもなんでもなくなってたままでした、気にしないで下さいっていうか忘れてください、って？」

「そんなこと言わないよ！」

「えー、でもそんなようなことでしょ？ 誘ってくれるのは嬉しいけど、好きな人は他にちゃんといるんで、あなたとはお付き合いできません、って」

「うーん、たださ、好きって直接言われたりしてるわけじゃないしさ、向こうもなんか、友達感覚で誘ってるだけなのいきなりあたしが先回りして断ったら、嫌な気分にならない？」

「友達感覚って何よ、友達感覚はないでしょー」

バス停に着いて、座っちゃうと立つのが大変だからっていう千里に付き合ってたあたしも自転車を支えたまま立ってた。休日でも平日でも車通りの激しい道で、けれど大きな通りだからバスも本数が少ないわけじゃない。十分も待たずにバスはやってきた。千里がゆっくり乗り込んで、あたしは持ったままだったクレープやワッフルのビニール袋をうっかり持って帰りそうになっちゃって、慌てて手渡す。

「ありがとう、またメールするから」

「うん、こっちこそありがとう、……早く治してね、遊びに行くから」
バイバイ、と手を振るあたしと千里の間で、音を立ててバスのドアが閉まる。

バスが発進してしまうのを見送って、あたしは自転車にまたがった。いまだに自転車に乗ると、身体がタカちゃんの家に行きたがって困る。

「……さて、と」

びゅんびゅん走って帰ろう。風切って。ちょっと悪い子になった気分で、すっごいスピード出して。泣いて、しまわないように。

タカちゃん。

あたし、今は失恋したけど、それでも大好きだから。

「さて、と！」

ペダルを強く踏みしめてあたしは進む。ぶつかったらごめん通行人、でもあたし失恋したての身だから大目に見てやってね。

「絶対美人になってやる、見てろよ高木泰徳！」

あの日、初めて聞いたタカちゃんのフルネーム。タカちゃんのタカは、名前じゃなくて苗字だった。だから、もしもあたしがタカちゃんって結婚できたなら、あたしもタカちゃんになれるってことだ。

「……タカちゃん、」

急いだら千里の乗るバスに追いつくかな、って、ちょっと思ったからあたしはスピードを上げた。風が強く頬に当たる。楽しいって、思えたからあたしは大丈夫、いつかまた、自転車飛ばして会いに行くね、タカちゃん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1414t/>

路地裏のクマ

2011年5月17日09時10分発行